



TITLE:

CPEHE Annual Report 2017

AUTHOR(S):

CITATION:

CPEHE Annual Report 2017. CPEHE Annual Report 2018, 2017: 1-41

ISSUE DATE:

2018-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/231216>

RIGHT:



CPEHE

Annual Report 2017

平成29年度
京都大学高等教育研究開発推進センター活動報告





Contents

I. はじめに	1
II. 教育・授業改善、FD	
1. 高等教育研究開発推進センターウェブサイトリニューアル	2
2. 全学教育シンポジウム	3
3. 新任教員教育セミナー	6
4. プレFD	10
5. 他部局との連携	14
III. ICTの教育的活用	
1. オープンコースウェア(OCW)	16
2. KyotoUx: 大規模オープンオンライン講義(MOOC)	18
3. KoALA: 小規模プライベートオンライン講義(SPOC)	21
4. 教育コンテンツ活用推進委員会	22
5. MOST(オンラインFD支援システム)	25
6. ICT活用教育のためのポータルサイト(CONNECT)	26
7. 高大接続を促進するためのポータルサイト(KNOT)	29
IV. 教育アセスメント	
1. 「京大生プロフィール」の開発	31
2. 教育学部との連携	32
V. 国際連携	
1. 国際シンポジウム	33
2. 訪問・参加報告	34
VI. コミュニティ・ネットワーク形成支援	
1. あさがおメーリングリスト	36
2. 大学教育研究フォーラム	36
3. 大学生研究フォーラム	38
VII. 産学連携	
1. 学校と社会をつなぐ調査	40

I. はじめに

センターの新ミッションと教育支援のさらなる充実と展開

高等教育研究開発推進センターは、国立大学法人の第3期中期目標・中期計画期間において、京都大学の教育改革・改善をより広範にわたって一層強力に支援・推進するため、以下の新たなミッションと共に、2016年度から「全学機能組織」として再出発しました。

- 高等教育における教授法、教育課程、教育評価、教育制度、ICT活用等、教育システムにかかる開発と実践を行う。
- 本学の教育改革・改善に資する取り組みについて、専門的立場から調査・企画・実施・評価・助言・協力をを行う。
- 実践的研究に基づく成果を、本学の教育の質の向上に供するとともに、国内外の高等教育の発展に寄与する。

現在、本センターは、「高等教育教授システム研究開発部門」、「教育メディア研究開発部門」、「教育アセスメント室」の2部門・1室から構成されており、大学機能強化プロジェクト「ICT(情報コミュニケーション技術)を活用した教育の国際化とエビデンスデータに基づいた教育改革のための支援基盤強化」(平成27～29年度、平成30年度から基幹経費化)をはじめとする教育支援の取組や産学共同研究プロジェクト等を通して、多面的で創発的な教育改革・教育改善に取り組んでいます。

この「CPEHE Annual Report」では、学内各部局や関連諸機関との連携を通じた先進的・萌芽的な試みも含め、本センターの様々な活動や事例が具体的に紹介・報告されています。

例えば、本学の教員や各部局の抱える教育的な課題の解決・改善に繋がるリソースや手掛かりを手軽に見つけることができる本センターの新しいウェブサイト(2017年7月にリニューアル)、「全学教育シンポジウム」、「新任教員教育セミナー」、「大学院生のための教育実践講座」等の全学的FDの取組、また各部局と本センターとの連携によって推進されているFDの取組や活動などが、図、写真や資料と共に報告されています。

ICTを利用した先端的な教育・学習支援についても、各部局のオープンコースウェア(OCW)や大規模オープンオンライン講義(MOOC)の取組状況や、新たに学内で試行的運用が始まった「オンライン講義・教材を活用し、より柔軟な教育・学習方法を提供可能」なSPOC(本学での呼称は、「KoALA」)、また教育におけるICTの活用を検討されている部局や教職員の方々のためのガイダンス的情報や実践事例を豊富に提供するポータルサイト「CONNECT」や、京都大学のオープンな教育コンテンツの活用促進によって高大接続・高大連携を支援する新たなポータルサイト「KNOT」についても紹介されています。

さらに、学内の各教育支援組織・部局との連携を通じて全学・各部局の教育学習改善支援の一翼を担う本センターの教育アセスメント室の活動として、部局支援の取組事例や「京大生プロフィール」の研究開発報告・試行的利用案内等も掲載されています。

本センターの前身である「高等教育教授システム開発センター」は、大学教育の実践的研究・開発を目的とする我が国初の組織として、1994年に学内共同利用施設として設立されました。以来20余年に渡って、社会や大学の変化や時代の流れと共に本センターの組織的なミッションや役割は変遷を辿ってきました。平成22年度から平成26年度にかけては、教育関係共同利用拠点(拠点名称:「相互研修型FD共同利用拠点」)として文部科学大臣より認定を受け、国際・全国・地域・本学の4レベルにおけるFD活動を中心とした大学教育の改善支援ネットワーク構築を、ナショナル・リーダーとして牽引しました。

これらの実績も踏まえ、本センターは、グローバルな視野や国内外の連携を堅持しつつ、再び学内共同利用施設として、本学の教育改革・改善の支援に鋭意取り組んでいます。国内外の大学を取り巻く状況が年々厳しさを増す中、世界をリードする高等教育機関である京都大学の教育により磨きをかけ豊潤にすべく、学内各部局とのより一層の連携・協働を図りつつ、センターの教職員スタッフ一同と共に尽力して参りますので、今後とも本センターの活動と展開にご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくごお願い申し上げます。



京都大学高等教育研究開発推進センター長
飯吉 透

II. 教育・授業改善、FD

1. 高等教育研究開発推進センターウェブサイトリニューアル

2017年7月、本センターのウェブサイトのリニューアルしました。従来の日本語サイトの刷新に加え、英語サイトも充実させました。今回のサイトでは、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考えています。そのため、①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計、②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築することを目指してきました。



日本語版 <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/> 英語版は末尾に/en/

ある時は、教員とお茶を飲みながらオリジナルの教育手法について談笑し、
ある時は、新任教員セミナーで名物教員のインタビューを紹介し、
ある時は、自身の記事掲載を若手教員に伝えているベテラン教員の姿を目撃し、
ある時は、フォーラムで他大学の教員からサイトについての話題が聞こえる。
そんな風景が浮かぶための中心となるサイトをイメージしました。

例えば、京都大学の先生方の疑問に答える「教育上の問題解決」のページを設けたり、特色ある取組(カリキュラムや授業など)を「教員インタビュー」によって可視化したり、できるだけ実践に役立つ情報を提供していきたいと考えています。まだまだコンテンツも少なく、その実現には時間がかかりますが、少しずつ育てていきたいと思います。ぜひ、当ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。

(山田 剛史)



教育上の問題解決のページ



教員インタビューのページ

2. 全学教育シンポジウム

本シンポジウムは、1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を越えた教職員の交流を図る場になっています。近年は教育担当理事が主催し、2016年度からFD研究検討委員会の企画により、本センターが実施・運営を行っています。

昨今、大学の社会的なミッションや役割が問われていますが、京都大学は、2017年6月に指定国立大学法人の指定を受け、教育力と研究力の一層の強化が進められています。そうした状況の中で、21回目にあたる今回のシンポジウムでは、「社会とつながる京都大学の教育」をテーマに設定し、多様な観点からこのテーマについて考えることにしました。

9月8日に桂キャンパス・船井哲良記念講堂で開催され、参加者は223名でした。

(1) プログラム

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演に続けて、大学の人文・社会科学分野の5専門教育部局長（現・前）にご登壇いただき、人文・社会科学系の教育の現状と今後の課題について、ご報告いただきました。これは、先に実施された「養成する人材像と教育課程を明確化するための検証プロジェクト」（『人を見つめるちから×社会を動かすちから—京都大学人文・社会科学の教育—』2017年3月）から得られた知見の共有をめざすものです。

午後の部では、社会の中における京都大学のありかたについて俯瞰し展望する山極壽一総長の基調講演に始まり、社会とつながる京都大学の教育的取組として高大連携や地域連携等に関する実践や活動についての4つの報告を共有した後、京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくかについて、執行部から5名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。クリッカーを使いながら、会場からのレスポンスをふまえて活発な意見交換がなされました。



テーマ1：パネリスト・モデレーター



テーマ2：パネルディスカッションの様子

(2)参加者の声

参加された先生方のご感想・ご意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数116件、回収率52.0%)。興味深かったプログラムとしてはテーマ2の「社会とつながる京都大学の教育: 高大連携・地域連携(報告・質疑応答)」(48.3%)が最も多く挙げられ、テーマ1「京都大学の教育の今とこれから: 人文・社会科学系からの提言(パネルディスカッション)」(42.2%)、テーマ3「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか(パネルディスカッション)」(39.7%)と続きました。「普段知らなかった高大連携等の話がお聞きできて良かった」「各登壇者を通して京都大学の教育に対する考え方がわかったのでとても有益だった」といった感想もあり、プログラム自体は概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップに参加したいと思うテーマでは、世界の研究大学の教育改革(38.8%)、中退者・成績不振者への対応(25.9%)、英語による授業(24.1%)、ICTの教育的利用(20.7%)などが多く挙げられており、シンポジウムで扱ったテーマへの関心の高まりも感じられました。感想の中には報告内容についてのクリティカルなコメントや、まだ取組が不十分なのではという意見も寄せられました。これらの結果から、それぞれの参加者が京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて振り返り、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

※アンケートの回答については複数回答可であったため、合計は必ずしも100%にはなりません。

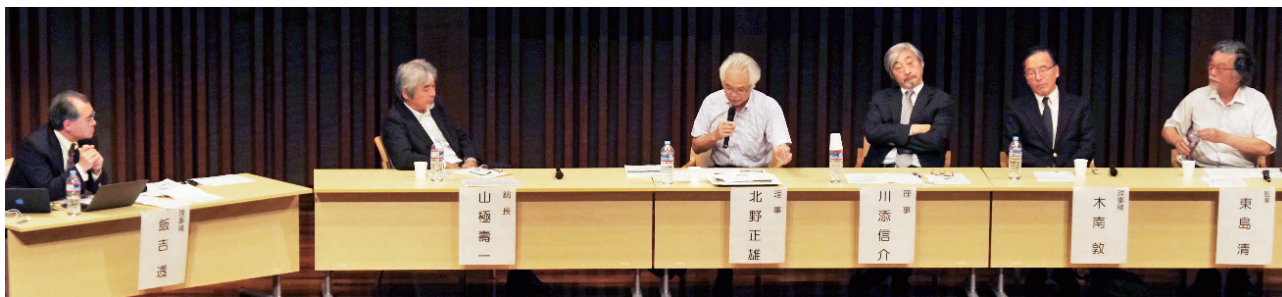
当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

- 全学教育シンポジウム: <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>

(松下 佳代・斎藤 有吾)



テーマ2: 報告者



テーマ3: パネルディスカッションの様子



テーマ3: パネリスト・モデレーター

全学教育シンポジウム プログラム

司会進行：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授

【午前の部】

10:00～	開会挨拶・基調講演 1：「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」 北野 正雄 教育担当理事・副学長
10:30～	テーマ1：パネルディスカッション 「京都大学の教育の今とこれから：人文・社会科学系からの提言」
10:35～	《モデレーター》飯吉 透 理事補(教育担当)・高等教育研究開発推進センター長 《パネリスト》 北野 正雄 教育担当理事・副学長 川添 信介 学生担当理事・副学長 平田 昌司 文学研究科長 高見 茂 前教育学研究科長 潮見 佳男 前法学研究科長 文 世一 経済学研究科長 杉山 雅人 人間・環境学研究科長
12:30～	(昼食・休憩)

【午後の部】

13:40～	基調講演 2：「京都大学の教育体制を世界の大学のデータから展望する」 山極 壽一 総長
14:00～	テーマ2：パネルディスカッション 「社会とつながる京都大学の教育：高大連携・地域連携」
14:05～	《テーマの説明》松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授 《報告・質疑応答》 高大連携(ELCAS)：村上 章 副ユニット長、農学研究科副研究科長・教授 高大連携(京大オープン教材)：田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授 地域連携(教育問題解決の支援)：桑原 知子 理事補(広報担当)・教育実践コラボレーションセンター長・教育学研究科教授 地域連携(サービス・ラーニング)：佐山 敬洋 防災研究所准教授
15:35～	(休憩)
14:00～	テーマ3：パネルディスカッション 「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか」 《モデレーター》飯吉 透 理事補(教育担当)・高等教育研究開発推進センター長 《パネリスト》 山極 壽一 総長 北野 正雄 教育担当理事・副学長 川添 信介 学生担当理事・副学長 木南 敦 理事補(教育担当)・法学研究科教授 東島 清 監事
16:55～	閉会挨拶
17:00	終了
17:15～	情報交換会 カフェ「Arte」

3. 新任教員教育セミナー

9月6日、京都大学百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2017」を開催しました。本セミナーは、2017年度が第8回目となり、京都大学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

京都大学らしい教育の在り方について考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています。

(1) プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1 2017年度 京都大学新任教員教育セミナープログラム	
13:00～	開会式（司会：高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史） 趣旨説明 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長（教育・情報・評価担当） 北野 正雄
13:30～	セッション2 ミニ講義 「埋め込み型研究公正教育のすすめ」 文学研究科准教授 伊勢田 哲治
13:55～	セッション3 私の授業 「薬学専門科目での反転授業とグループ学習の試み2017」 薬学研究科教授 金子 周司
14:20～	セッション4 京大の教育・学習支援 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史／田口 真奈
14:30～	休憩
14:50～	セッション5 グループ別セッション（参加型セッション）（詳細は表2参照） 休憩
16:30～	セッション6 インテグレーションセッション
16:50～	閉会式
17:30～	閉会挨拶 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。大学を取り巻くマクロな状況を踏まえつつ、京都大学が取り組んでいる様々な教育改革について紹介がありました。特に、昨今話題になっている高大接続に関する取組について、新たに始まった特色入試も交えながら紹介されました。

セッション2では、伊勢田哲治文学研究科准教授より「埋め込み型研究公正教育のすすめ」と題したミニ講義がありました。高等教育機関全体にとって喫緊の対応課題となっている研究公正について、教育（授業）に埋め込む形で学生への研究公正を行うという先進的な取組が紹介されました。

セッション3は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、金子周司薬学研究科教授より「薬学専門科目での反転授業とグループ学習の試み2017」と題した授業実践の紹介がありました。京都大学が有する授業サポートツールである「PandA」を活用し、授業デザインから実際の成績データとの関連まで含めて紹介されました。

セッション4では、本センターの山田剛史准教授、田口真奈准教授から「京大の教育・学習支援」について紹介がありました。実際には冊子にまとめた『教育サポートリソース』、最近全面リニューアルした「センターウェブサイト」、新たに製作されたポータルサイト「CONNECT」について配布・提示しました。

その後、セッション5は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました(表2)。最後のセッション6は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

表2 セッション5 参加型セッションの各テーマ			
テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター (センター担当者)
「英語による授業」を担当することになったら	情報環境機構長／ 国際高等教育院教授 喜多 一	英語による授業を急に担当することになったとしたら困惑する教員も多いのではないだろうか。ここでは、そのような事態になった場合に、どのように考え、何から準備すればよいのかについて、参加者の先生方と一緒に考えたいと思います。	Nikan研究員 河野研究員
科学を「伝える」授業から、科学が「伝わる」授業へと転換するには	滋賀大学教育学部准教授 (元京都大学iCeMS特任准教授) 加納 圭	以下のような方々に、「科学的知識」(専門用語など「科学の知識」だけでなく、科学の営みといった「科学についての知識」の両方を含む)が「伝わる」授業のコツをお伝えします。 ●授業では最大限伝えているのに、伝わっているという手応えがいまいち得られていない。 ●黒板やホワイトボードやパワーポイントを用いた一方方向の授業から、より双方方向性の高いアクティブラーニングへと徐々にシフトしていきたい。 ●科学コミュニケーションに興味がある／あった。 一方方向の授業＝伝える授業、アクティブラーニング＝伝わる授業、という図式で捉えず、一方方向の授業でも「伝わる」授業は可能だという前提で進めていきます。	岡本特定助教
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム准教授 中川 純子	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいのでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	斎藤特定助教
講義科目でおこなうアクティブラーニング型授業	高等教育研究開発推進センター 教授 溝上 慎一	50-150人規模の講義科目でどのように学生に授業に参加させるか、アクティブラーニング(講義で聴くだけでなく、書く、話す、発表するなどのアウトプットの学習活動を入れるか)を、理論的、実践事例を交えてセミナーをおこないます。後期からすぐ導入できるやり方・技法をお伝えします。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、少しやったことあるが、この機会にしっかり学びたいという方まで参加可能です。	河合研究員
ICTを使って、普段の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に	高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈／酒井 博之	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセッションにしたいと思います。	安宅特定研究員



(2)参加者

本セミナーは、教育目的に限定して設計されているため、受講対象となる新任教員を、「平成28年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部局に対して参加者依頼通知を行いました。当日の参加者は69名(教授7名、准教授18名、助教29名、講師14名、助手1名)でした。

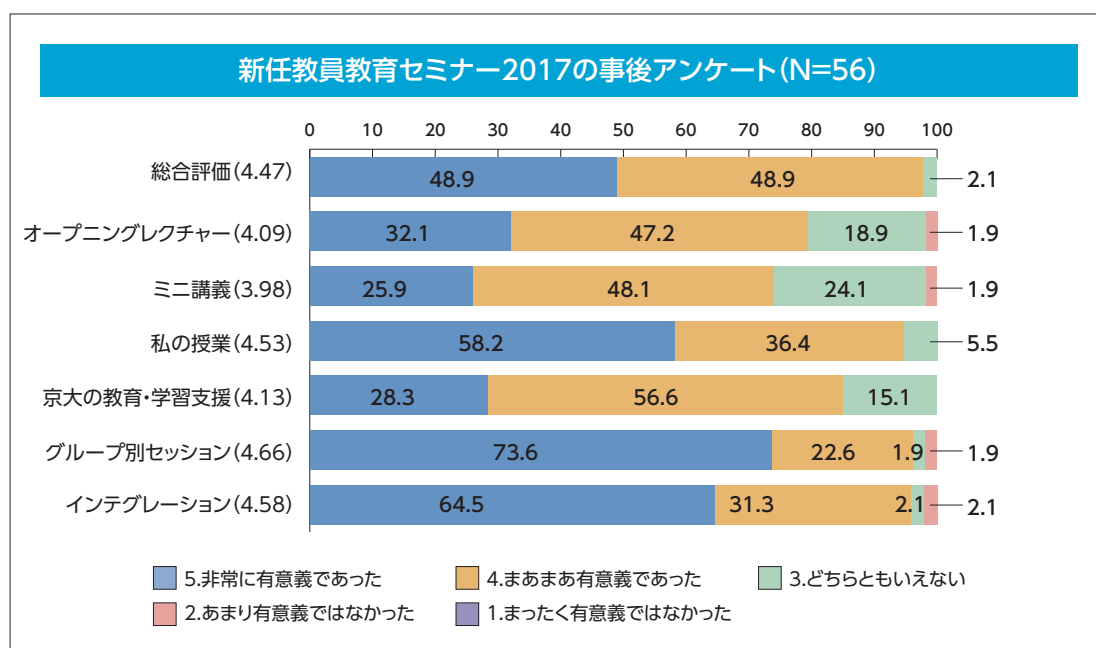
(3)参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う

事後アンケートを行いました。その結果、56名(全体の81.2%)から回答が得られました。

①プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度は、5段階で4.47(有意義と回答した割合は97.8%)と高い値が得られました(下図参照)。個々のセッションでみると、グループ別セッションが最も高く(4.66)、次いで2016年度から導入したインテグレーションセッション(4.58)、私の授業(4.53)となっていました。



②プログラム全体で追加すると良いと思われるもの

学内外の動向や教育支援の具体的な内容などのトピックが寄せられました。

- 外国のFDでは、SNACKSとかCOFFEE/TEA等出してくれて、もう少し自由に話す時間もありますので是非。
- 他大学のFDの状況。
- もっと京大の教育の現状を知りたい。
- 教育支援の内容をもう少し詳しく知りたい。
- 教育支援(センターwebサイトなど)の具体的な使い方など。
- 京大生らしい人材を育てるにはどうすべきか具体的に議論できる情報が欲しい。

③グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの

留学生対応やICT活用の実際など多様なニーズが寄せられました。

- 京大の将来像と教育の仕方の関係などを考えるセッションがあっても良い。
- 留学生の対応を含める。
- 学生を博士に進学させるには。
- プレゼンテーション資料の作り方: デザイン的な見やすさ、読みやすさ。
- ICTを使って実際に授業を作る。
- ICTのコーナーでは、もう少し汎用性のあるテーマが含まれると良いかと思いました。
- 反転授業。
- アクティブラーニングの具体的なデザイン方法について。

④本セミナーの改善すべき点

最も多く出た意見として、インテグレーションセッションの時間が少なくもっと欲しかったといったものでした。一昨年の倍(20分→40分)にしたにも関わらず、まだまだ議論したいというご意見をいただきました。

- レクチャーを少なくして、グループ別セッションを増やす。
- グループ別セッション、2つ参加でも良いかもしれない。
- セッション1～4が長いです。1つ～2つけずとも良いのでは。

- セミナーが長時間に及ぶ点。セッション1～4については事前に資料、動画等を配布し、30分程度に短縮しても良いと感じました。
- 長さ(時間)、内容ともに良かった。セッション5の内容をもう少し充実して欲しい。テーマ自体は良いと思うが、内容があまり深くなく、表面的、一般的なディスカッションだった。
- セッション6はもう少し長くてよい。MCグループは、1、3(セッション5)しか参加者がいなかったのが残念。
- 最後のインテグレーションセッションは、もっと時間を取っても良いと思います。
- インテグレーションセッションの時間がもう少し欲しかったです。
- 参加者同士のコミュニケーションを取れる時間を増やすと良い。

⑤本セミナーに参加して良かった点

たくさんの感想をいただきました。全て掲載できませんが、他分野の先生方と話せたりつながりができたことを良かったと感じておられる先生が多かったです。教育に対して自信がついたり、意欲が上がったといった声も聞かせていただきました。

- 京都大学として教育にかける情熱が伝わって来ました。教員としての自覚を促されました。
- 自分一人では思いつかない様な授業の進め方が紹介されたので参考になった。新任教員だけではなく、少し経験を重ねた人にも参考になると思った。
- 実際に講義に活用できるノウハウ(アイスブレイクの手法や情報の発信側、受信側の違いを知ることのできるワーク)について知ることができた点。
- 他の研究分野の研究者と知り合うことができた。現在の大学をめぐる教育・研究の問題点を知ることができた。
- FDの機会がなかなか無く、すべての情報、また討論、交流が有益であった。
- 皆さんエネルギーで、刺激を受けた。

こうした意見を参考に、今後もよりよいプログラムになるよう改善していきたいと思います。

(山田 剛史)

4. プレFD

「プレFD」とは、これから大学教員になろうとする大学院生やオーバードクター(OD)・ポスドク(PD)のための職能開発活動の総称です。ここでは、本センターが支援する、3つのプレFDの取組についてご紹介いたします。

(1) 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールで、2009年度から実施されています。

本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2～5回の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約140名が修了証を得ています。

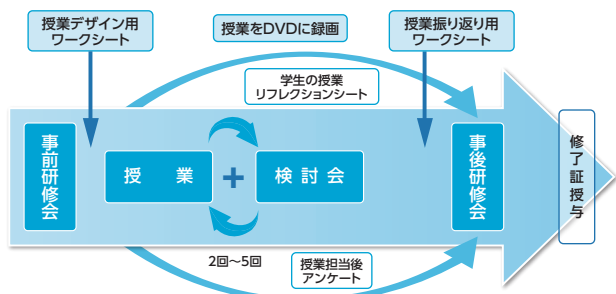
2017年度は、文学研究科よりコーディネーター4名、教務補佐員3名、講師20名が参加し、本センターより3名がこれをバックアップする形で、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

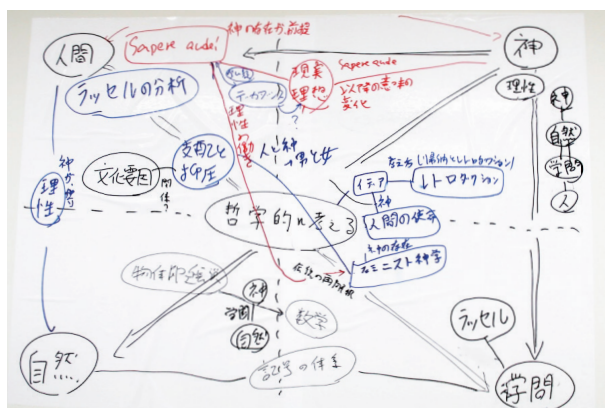
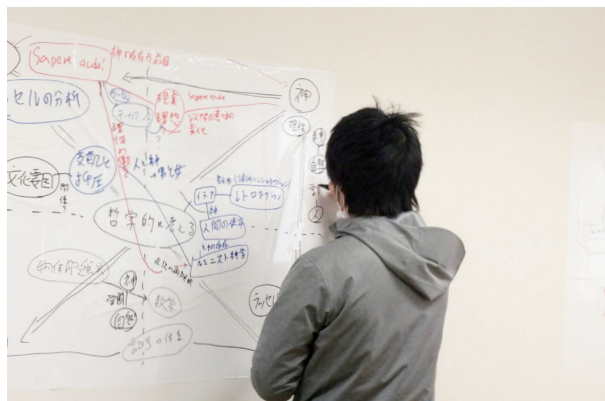
● 文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>

(田口 真奈・斎藤 有吾)



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ



(2) 大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

2015年度より、ブレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、文学研究科が提供する単位互換リレー講義「人文学入門」が開講されました。本授業は、京都大学文学研究科が初めてコンソーシアム京都に提供する単位互換授業で、京都駅近くのキャンパスプラザ京都にて実施されています。受講生は、京都大学の学生を含め、様々な大学から集まっています。本授業は、特色ある科目として、大学コンソーシアム京都により「プラザ推奨科目」に認定されています。

2017年度は「常識を疑う 日常に隠れたメディア・コミュニケーション」を全体テーマとして、コーディネーター1名と講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。内容は、我々が普段、言語や身体など無数の「メディア(媒体)」を通して世界を認識していること、そして日常のありとあらゆる場面で「コミュニケーション(伝達機構)」が機能していることを、歴史学や哲学、心理学、言語学などの観点から広く学ぶものとなりました。

本プログラムでは、ブレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の1年前にスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた授業形式にも積極的に挑戦する本授業は、受講生から多くの肯定的評価を得ています。2017年度の受講生に授業に対する満足度を5件法(1: まったく満足していない ～ 5: 非常に満足している)で評価したところ、全体平均4.00点でポジティブな評価を得ました。また自由記述では、「授業ではなくゼミに近い形で良かった。親身さを感じた」「今まで感じることのなかったメディアと付き合うことによって、違った視線で生活を送ることができた」などの感想をいただき、ブレFD修了生たちの授業が内容・形式ともに魅力的なものとなっていることがうかがえます。

● 文学部単位互換リレー講義「人文学入門」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

(田口 真奈・斎藤 有吾)



(3) 大学院生のための教育実践講座

本講座は、京都大学FD研究検討委員会が主催、本センターが共催し、将来、大学教育に携わることを希望する京都大学の大学院生（PD・研修員などを含む）のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で13回目となります。2017年度は、8月22日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。様々な専門分野から29名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに授業実践について多様な観点から検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークまで、とても豊富な内容で、受講生それぞれが「大学でどう教えるか？」に対する考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。加えて、全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する

満足度を5件法（1：まったく満足していない～ 5：非常に満足している）で受講生に評価していただいたところ、満足度の平均4.8点と、非常に満足していただけたことがうかがえます。また、このような講座に対してどう思うかに関する自由記述では、「私の場合、現段階では大学教員を志すか迷っているので、本講座を通して実際に大学教育に携わるとはどのようなことなのか、ということに関して具体的なビジョンを描くことができ、進路決めの有用な判断材料となりました」など、このような講座の必要性を改めて感じるお声をいただきました。

● 大学院生のための教育実践講座

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2017.php>

（松下 佳代・斎藤 有吾）

プログラム	
10:00～	開会式 挨拶：北野 正雄 京都大学理事・副学長
10:20～	セッション 1 ミニ講義 1 「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」： 松下 佳代 京都大学高等教育研究開発推進センター教授
10:45～	セッション 2 グループ討論 1： 「アクティブラーニング」「ICT 活用」「多様性」「協働・協調学習」の 4つの部会に分かれて議論
11:45～	セッション 3 ランチと自由討論
13:00～	セッション 4 コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」： 蓮 行 劇団衛星主宰
14:20～	セッション 5 ミニ講義 2 「後輩たちに伝えたい大学教員になる前の準備あれこれ」： 田中 一孝 桜美林大学リベラルアーツ学群専任講師
15:05～	セッション 6 グループ討論 2： ジグソー法により他の部会から得た意見やこれまでの講義の知見をもとに、 部会別にさらに深く議論
16:05～	グループ討論整理
16:40～	セッション 7 全体討論： 各部会 8 分の発表と 5 分程度の質疑が行われ、活発な議論を展開
17:40～	ラップアップ
17:55～	閉会式 挨拶・修了証授与： 飯古 透 京都大学 FD 研究検討委員会委員長・京都大学高等教育研究開発推進センター長 閉会式終了後 情報交換会（～18:30）



(4) 研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」

京都大学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施しています(詳細は、ウェブサイトにて <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/graduate/cross>)。

その中の「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」(p.12参照)は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2017年度は2018年2月8日・9日・13日の3日間で実施されました。受講生は10名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(教育学研究科4名、人間・環境学研究科3名、地球環境学舎2名、アジア・アフリカ地域研究科1名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。

終了後のアンケート(10名中10名が回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均3.9)」「講義中に学生の質問・発言等を促してくれた(3.9)」「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.7)」「自分の専攻分野にとって重要な内容だった(3.8)」「自分の将来の進路に役立つ内容だった(3.8)」「この講義の関連分野に興味や関心が深まった(3.8)」「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(3.8)」(いずれも4段階評定)など高い評価が得られました。

自由記述からは、「他の専門の方のお話は面白く、それと自分の専門の接点が見出せた時、全員がく同じ一つの現実>を扱っている気がして、知的な興奮がありました」「フィールドの違う人と、その場だけでなく、3日間通して一つのことをするのは刺激的でした」「大学の授業について体系的に学ぶことができた」「学際



的な授業をどう組み立てていくことができるか、協働で授業を組み立てる経験ができたことは必ず今後に活かせると感じた」「大学院生や研究員などが受講すべき内容がつまっていた。もっと広く周知してもよいと思う」「とても有意義な授業だったので、オススメしていきたいです！」など、様々な声が聞かれました。

(山田 剛史)

5. 他部局との連携

(1) 宇宙総合学研究ユニットとの連携

① 有人宇宙教育プログラムへの協力

京都大学学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットでは、宇宙飛行士の土井隆雄特定教授を中心として、「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」(文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費、2016～2018年度)の取組が進められています。このプログラムの目的は、宇宙に関わる高い専門性を持つ次世代人材の育成と潜在的な宇宙利用の拡大の両面に貢献することであり、全学共通科目「宇宙総合学」、ILASセミナー「有人宇宙学実習」、研究科横断型教育プログラム「有人宇宙学」が開講されています。

本センターは、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力しています。宇宙総合学については、授業評価として学生に対するフォーカスグループインタビューの実施、有人宇宙学については、学習活動・学習評価として「有人宇宙活動」をキーコンセプトとするコンセプトマップの作成(事前・事後)などを提案・支援しています。

② パラボリックフライト事業への協力

宇宙総合学研究ユニット、霊長類研究所などとの連携による「パラボリックフライトを用いた微小重力下における社会的認知・認知進化に関する研究教育活動」(2017年度総長裁量経費)にも参加しています。パラボリックフライトとは、航空機を放物線状に飛行させることで微小重力を体験できるもので、このような重力環境の変化が、時空間認知能力、社会心理(利他性など)、宇宙観・宇宙への関心などにどんな影響を与えるかを研究しています。

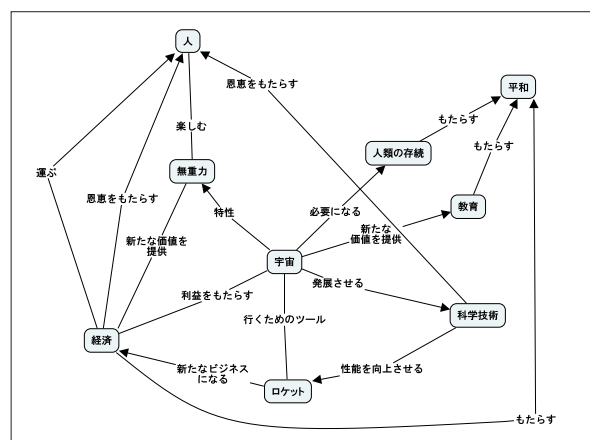
2017年10月28日、12月16日に、パラボリックフライトが行われ、学生10名が搭乗しました。本センターでは、宇宙観・宇宙への関心などの変化について、①「宇宙」をキーコンセプトとしたコンセプトマップの作成、②身体感覚受容感尺度(PABS)の質問紙、③有人宇宙活動に関する認識の変化に関する自由記述、の3つの調査を実施しました。

本事業の成果報告は、2月10日・11日に開催された第11回宇宙ユニットシンポジウム「人類は宇宙人になれるか?—宇宙教育を通じた挑戦—」において行われました。

(田口 真奈・松下 佳代)



パラボリックフライトの様子



コンセプトマップ(パラボリックフライト後)

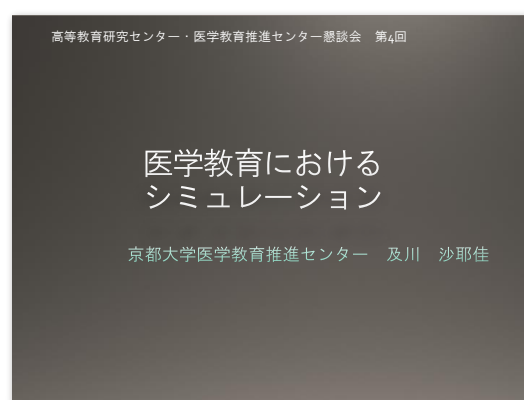
(2) 医学教育・国際化推進センターとの連携

① 情報交換を目的とした緩やかな連携

医学教育の推進に特化した医学教育・国際化推進センターと、特定の分野に限定しない形で教育改善支援を行う本センターとが、お互い持つ知識やリソースを提供・共有できるような懇談の場を設けて、様々な話題について情報交換（懇談会）を行っています。できる限り負担をかけないよう、昼食時間を利用したり、開催頻度も不定期にしたりと、緩やかに長く続く関係を構築しています。2017年度は、懇談会を契機に、個別のテーマについて更に踏み込んだ連携の在り方について議論を行っています。本センターでは、組織間の制度的な連携のみならず、こうした緩やかな情報交換を目的とした連携も積極的に進めていければと考えています。



高等教育研究開発推進センターからの話題提供



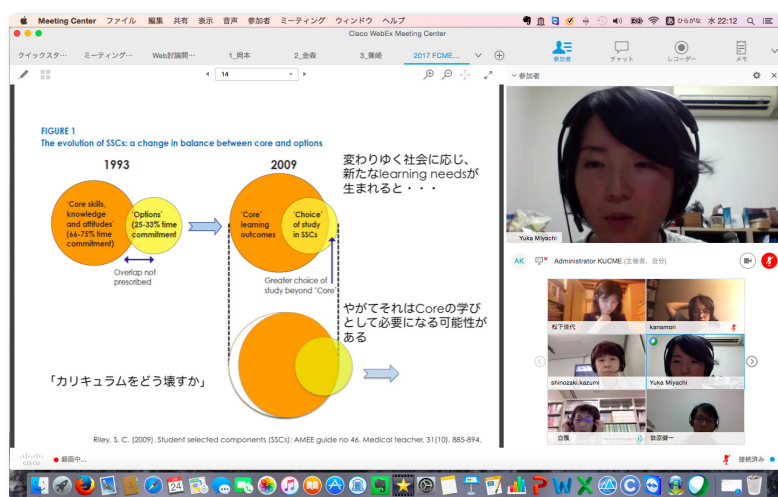
医学教育・国際化推進センター(旧医学教育推進センター)からの話題提供

② FCMEへの協力

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)」(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/index.html>)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象にしたもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようにすることを目標としています。毎年、全国から10名程度の医師が参加し、年3回の参加体験型学習、および月2回のWeb討論型学習を通

して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学をもち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。本センターからは、必修科目の1つである「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊すー自由な学びの場の構築」に、講師の一人として参加しています。

(松下 佳代・山田 剛史)



Web討論型授業の1コマ

Ⅲ. ICTの教育的活用

京都大学では、教育の質的転換をはかるために、オープンコースウェア(OCW)やMOOC等、ICTを利用した教育の推進に積極的に取り組んでいます。本センターは京都大学のOCWやMOOCの制作や運用に関する担当部局としてこれらの教育コンテンツの公開や利用を行っています。また、センター内に設置された教育コンテンツ活用推進委員会や関連部局との連携を通じて、OCWとMOOCをはじめとするICT利用教育の推進や普及について継続的に協議を行い、その成果はCONNECT等を通じて広く発信しています。

1. オープンコースウェア(OCW)

1) 京都大学OCWについて

2005年から始まった京都大学OCW(<http://ocw.kyoto-u.ac.jp>)は、学内で実際に利用している講義教材をインターネットで公開するプロジェクトです。学内の学生、教職員、他大学の学生、関連学会の研究者、京都大学を志願する高校生、さらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に門戸を広げ、京都大学の講義内容を知ってもらうことを目的としています。また大学教育の情報公開の一環として、全部局のシラバスをOCWで公開しています。今後も世界へ向けて、京都大学のビジビリティを高め、教育・研究から生まれた知識を広く社会に提供できるように、コンテンツを充実させていきます。OCWは、人類の知的資産への貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。

対外的な交流としては、世界の300以上のOCW推進機関で構成されるオープンエデュケーションコンソーシアム(旧:国際オープンコースウェアコンソーシアム)、日本オープンコースウェアコンソーシアムに加盟しており、国内外でOCWを推進している大学や企業との交流をはかっています。

OCWで講義教材の公開を希望する本学の教職員の方は、OCWトップページの申込フォームをご利用ください。



京都大学オープンコースウェアのトップページ

(2) 公開している講義コンテンツ

2017年度時点で公開している講義数は738講義です。その内訳は、「通常講義」が323(日284、英34、仏5)、「公開講座」が278(日228、英48、仏2)、「国際会議」が68(日4、英52、仏12)、「最終講義」が69(日68、英1)となっています。

部局別内訳は以下の表の通りで、京都大学の50部局以上がOCWを公開しており、OCWが学内に認知され積極的に利用されていることがわかります。

(酒井 博之・藤岡 千也)

OCWの公開数				
※括弧内は、国際会議については英語以外の内数、それ以外は日本語以外の内数				
	通常講義	公開講座	国際会議	最終講義
国際高等教育院/全学共通科目	77 (英 8)	10		
総合人間学部/人間・環境学研究科	12 (英 1)	27 (英 18, 仏 2)	18 (仏 12)	5
文学部/文学研究科	12 (英 5)	3	1	1
教育学部/教育学研究科	9 (英 3)	16 (英 1)	2 (日 1)	4
法学部/法学研究科/法科大学院	6	4		
経済学部/経済学研究科	15 (英 2)	1		6
理学部/理学研究科	19	12		6
医学部/医学研究科/医学部附属病院	18 (英 3)	20 (英 3)	2	4
薬学部/薬学研究科	3			
工学部/工学研究科	23 (英 1)	17	3	16
農学部/農学研究科	85 (英 8)	3 (英 1)		1

	通常講義	公開講座	国際会議	最終講義
情報学研究科	6 (英 2)	1 (英 1)	1	6
生命科学研究科	31 (英 1)	6 (英 1)	2 (日 1)	1
地球環境学堂・地球環境学舎	3	1		
経営管理大学院	3	4	1 (日 1)	
アジア・アフリカ地域研究科				2
エネルギー科学研究科		1		1
総合生存学館/思修館		1 (英 1)	7	
化学研究所		1	1	2
人文科学研究所		3	2	1
再生医科学研究所		2		
エネルギー理工学研究所		1		1
生存圏研究所		1		2
防災研究所		10		
基礎物理学研究所		4	2	2
ウイルス研究所		4		
経済研究所		3	1	
数理解析研究所		1		2 (英 1)
原子炉実験所		4		
霊長類研究所		2		
東南アジア研究所		1 (英 1)		2
iPS細胞研究所		4		
学術情報メディアセンター		15	3 (日 1)	1
放射線生物研究センター		2		
生態学研究センター		2		
地域研究統合情報センター		1	1	1
野生動物研究センター		2		
高等教育研究開発推進センター		6	9	1
総合博物館		3		
低温物質科学研究センター		1 (英 1)		
フィールド科学教育研究センター		14		
こころの未来研究センター		2		1
国際交流センター		1 (英 1)	2	
学生総合支援センター		1		
アフリカ地域研究資料センター		2		
環境科学センター		1	1	
学際融合教育研究推進センター			1	
情報環境機構		3		
附属図書館		10		
物質－細胞統合システム拠点 iCeMS		19 (英 14)		
安寧の都市ユニット		4		
アートサイエンスユニット		4 (英 1)		
デザインスクール	1			
未来創生学国際研究ユニット		2		
研究国際部		3 (英 1)	5	
産官学連携本部		2		
教育推進・学生支援部		2		
総務部総長室		7 (英 3)		
京都大学生協学生委員会		1		
広報課			1	
国際交流推進機構				

その他 ● 渉外部広報・社会連携推進室：「入学式・総長式辞 (32)」、「京都大学大学紹介 (4 (日1, 英1, 中1, 韓1))」

● 学務部：「ジュニアキャンパス紹介 (8)」

2. KyotoUx:大規模オープンオンライン講義(MOOC)

(1) 京都大学におけるMOOC

京都大学は、MOOC(Massive Open Online Courses:大規模オープンオンライン講義)プラットフォームのedX(<https://www.edx.org>)を通じ、全世界に向けて英語による無償のオンライン講義を配信しています。OCWと異なり、MOOCは大学の講義と同様に、開講期間中に毎週講義コンテンツが追加され、課された問題や試験に解答しながら、一定の成績を満たした受講者¹には修了証が発行される点が特徴で、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に大きな注目を集めています。edXは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が中心となり設立された、世界トップクラスの大学や教育機関で構成されるMOOCの大学コンソーシアムで、京都大学は世界トップレベル54校から成るチャーター校として日本で初めて参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています(図1)。

本センターはMOOCの制作、運用、分析・評価を担当しており、2016年度は8講義開講しましたが、2017年度は新規2講義を含む12講義を開講しています(表1、図2)。今年度の新規講義のうち、「More Fun with Prime Numbers」は、伊藤哲史理学研究科准教授による素数に関する講義で、過去に提供した4週間の講義のコンテンツ(講義ビデオ・課題を含む)をすべて刷新し、素数の応用例として暗号化に関するトピックなどが追加されました。伊勢田哲治文学研究科准教授による「Introduction to Animal Ethics」は、各週で扱うテーマの導入として漫画を教材に利用した動物倫理に関する講義です。再開講を含め、多くの講義が受講登録可能となっていますので、ご自身の興味や関心に応じてアクセスしてみてください。

注1:受講者が修了証を得るためには有償(現在は\$49)のVerified Trackに登録する必要があります。

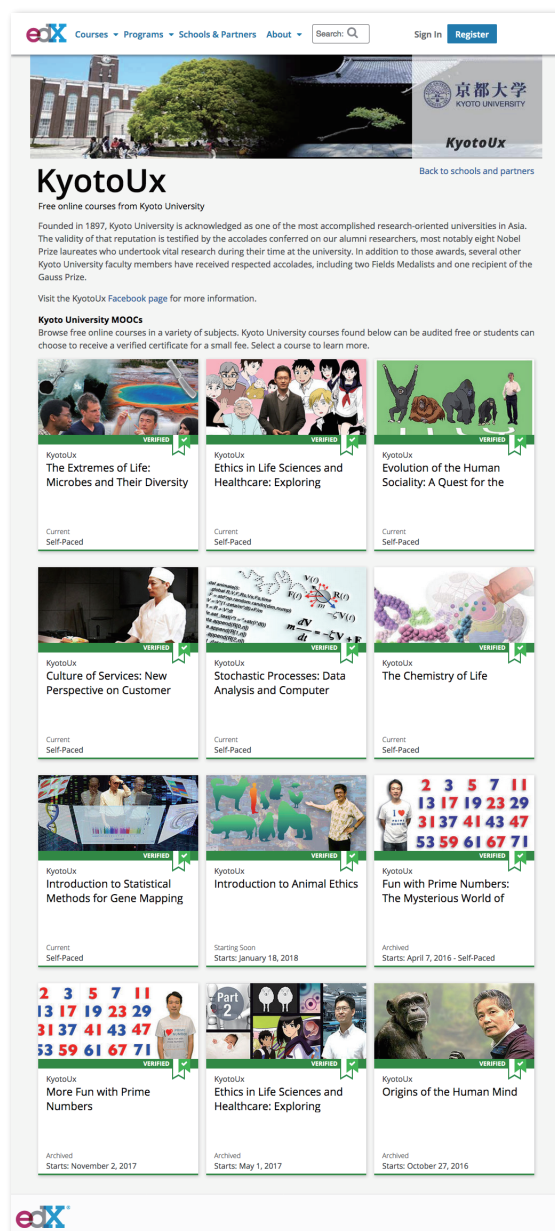


図1 edXのサイト(KyotoUxからの提供講義)



図2 2017年度新規講義の紹介ビデオ(左:伊藤哲史准教授、右:伊勢田哲治准教授)

表1 2017年度開講講義

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考**
4月1日～ 2018年3月31日	The Chemistry of Life	上杉 志成 教授 (物質-細胞統合システム拠点/化学研究所)	15週 Self-paced	4回目
4月1日～ 8月10日	Culture of Services: New Perspective on Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	3回目
4月1日～ 2018年2月29日	Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping	山田 亮 教授 (医学研究科)	4週 Self-paced	JGP 3回目
4月17日～ 10月26日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
5月1日～ 11月9日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga – Part 2	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
8月3日～ 2018年8月2日	Introduction to Stochastic Processes: Computer Simulation and Data Analysis	山本 量一 教授 (工学研究科)	6週 Self-paced	JGP 2回目
9月21日～ 2018年3月29日	Culture of Services: New Perspective on Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	4回目
11月2日～ 12月7日	More Fun with Prime Numbers	伊藤 哲史 准教授 (理学研究科)	5週	
11月9日～ 2018年9月13日	Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior	山極 壽一 総長	6週 Self-paced	2回目
12月21日～ 2018年10月25日	Extremes of Life: Microbes and Their Diversity	跡見 晴幸 教授 (工学研究科)	4週 Self-paced	JGP 3回目
12月21日～ 2018年9月20日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	10週 Self-paced	JGP 3回目
2018年1月18日 ～2月22日	Introduction to Animal Ethics	伊勢田 哲治 准教授 (文学研究科)	5週	JGP

*配信期間欄の "Self-paced" は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

**備考欄の "JGP" はスーパーグローバル大学創成事業「京都大学ジャパングートウェイ (JGP)」からの提供講義です。これらの講義は本事業の助成を受け開講しています。また、回数は再開講を表しています。

(2) コースカタログの制作

京都大学が提供するMOOCに関して、学内の教職員に対する周知や普及促進をはかるため、これまで制作・公開してきた講義内容や関連する情報を集約し、読者がその全体像を俯瞰できるようなツールとしてコースカタログ「Learn on the Planet」を制作しました(図3)。

個別の講義の概要紹介のほか、MOOCを担当した京都大学の教員や、講義制作や受講者対応に関わった大学院生の体験談なども掲載されています。また、MOOCの教材を学内の講義で、反転授業や議論の題材として活用している事例も取り上げています。MOOCの取り組みに興味をお持ちの方、今後MOOCで講義を配信してみたい方は、以下のURLよりPDF版がダウンロードできますので是非ご一読ください。

今後とも講義の増加に応じてコンテンツを追加するとともに、学内へのMOOCの周知・普及のために学内の授業での活用事例等を含めた内容の充実をはかります。

<https://www.higheedu.kyoto-u.ac.jp/connect/resources/kyotoux.php>

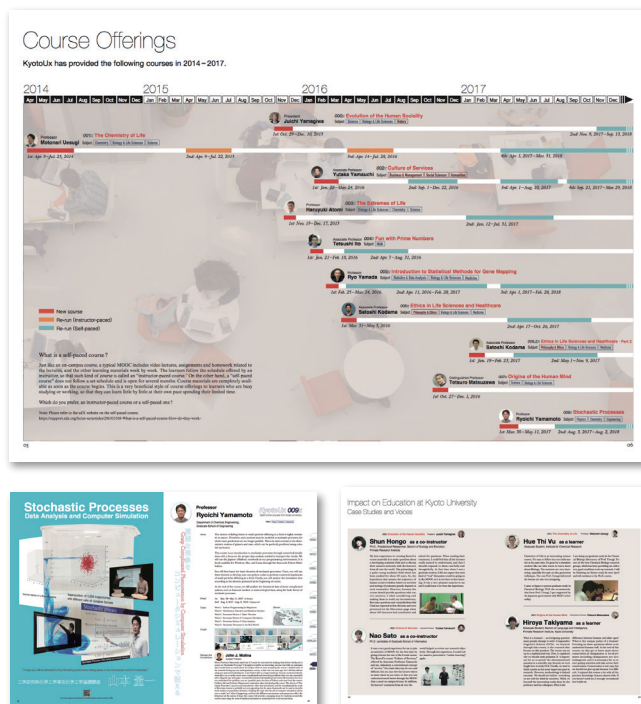


図3 コースカタログ(抜粋)

(3)MOOCの制作・運用について

MOOCの制作や開講期間中の運用については、本センターの担当スタッフが支援を行っています。

講義を担当する教員の決定後、本センターの担当スタッフとの打合せを通じ、講義の内容や構成等を決めていきます。講義のタイトルや概要が決まると、講義の内容や魅力を伝える講義紹介ビデオ(p.18図2参照)を制作しedXから公開します。このビデオは講義開始の数ヶ月前に公開し、講義開始までに受講者を募ります。

講義開始までに、スライド等の教材や問題の作成など講義コンテンツの制作を進めていきます。講義ビデオの撮影・編集や講義で課す課題の作成についても専門スタッフが支援します(図4)。

講義内容や講義担当教員の目的や要望に合わせ、様々な講義素材を制作することが可能です。講義ビデオは主に学内の撮影スタジオで収録しますが、プレゼンテーションスライドを活用できる大型電子パッドや画像合成技術を用いた教材など、多様な教材を作成できます(図5)。また、スタジオ内の撮影だけでなく、実験風景やフィールドワーク、インタビュー、ゲスト講師によるミニ講義、アニメーションの制作など、講義で必要な教材の制作支援も行っています(図6)。

MOOCで扱う小テストや最終試験等の課題では、自動採点が行われます。そのため、これまで大学の中で行ってきた成績評価の方法をそのまま使うことが困難な場合も多くあります。レポート等の自由記述課題を受講者同士で相互に採点するピアアセスメントの利用など、講義の目的に合わせた課題設定の提案も行っています(図7)。

講義中の受講者の学習支援は、主に講義ごとに設置された掲示板を通じて行います。技術面や講義配信システムに関する質問はセンターのスタッフが対応しますが、講義内容の質問については、専門分野の知識を持つTAを雇用し対応します。また掲示板は受講者同士の学び合いや議論・交流の場としても活用されています。

本センターでは、講義の目的と講義素材の組み合わせによる学習効果についても研究し、より教育効果の高い素材の制作を目指しています。

(酒井 博之・岡本 雅子)



図4 専門スタッフによるMOOCのビデオ制作支援・スタジオでの撮影の様子

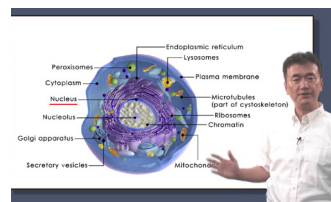
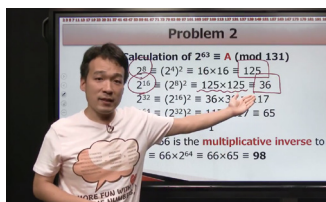


図5 講義スタイルに合わせた講義ビデオの作成

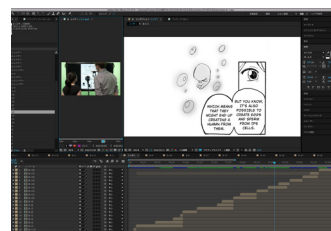
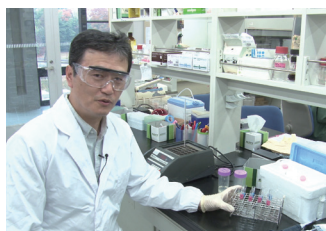


図6 講義素材の制作支援(例:実験風景・アニメーション制作)

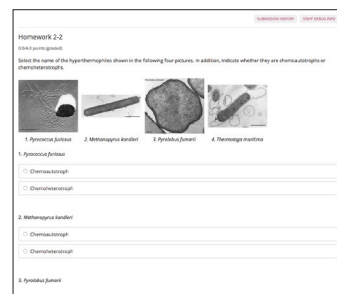
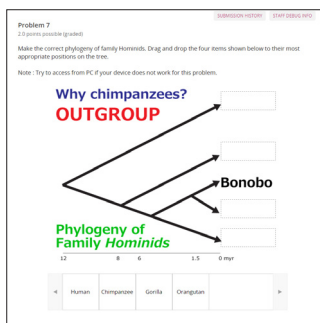


図7 多様な課題作成ツール

3. KoALA:小規模プライベートオンライン講義(SPOC)

(1)SPOCとは

MOOCが世界中に開かれた英語によるオンライン講義であるのに対し、MOOCと同様のツールや仕組みを利用し、各大学が自学の学生向けに提供するオンライン講義・教材・学習環境を総称してSPOC(Small Private Online Courses)と呼び、世界的に注目が集まっています。

SPOCでは、各大学固有の目的やニーズに応じた講義や教材を制作し、特定の受講者に向けて講義を提供したり、学内の他の教育プラットフォームとの相互接続による学習データの分析や活用が可能となります。SPOCでは日本語でも講義コンテンツを制作することができ、反転授業や予復習のための学習環境を学生に提供したり、課題作成ツールにより学生の理解度を確認するなど、多くのメリットがあります。また、SPOC導入により、オンライン講義・教材作りに関わる教員や利用する学生が増えることで、学生の主体的・能動的学習を加速・後押しすることができ、今後の京都大学におけるMOOCの質的向上・量的増大にも繋がることが期待されます。

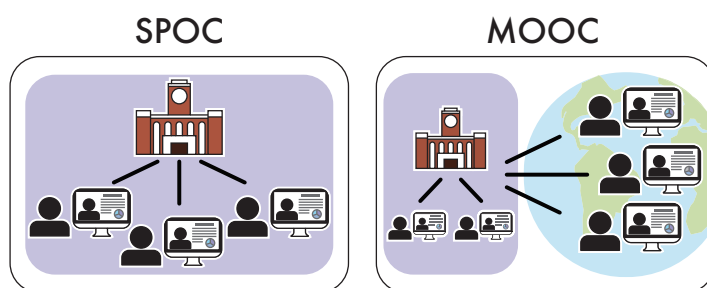


図1 SPOCとMOOC

(2)KoALAの開発と試行

本センターでは、2016年度に、edXのプラットフォームがオープンソース化された「Open edX」を利用し、主に京都大学の学生や教職員が利用することを目的として「KoALA:Kyoto University Online for Augmented Learning Activities」を導入しました。将来的には学内の講義での活用のほか、個別のニーズに応じて一般公開等のオプションも提供予定です。

KoALAの試行として、坂出健経済学研究科准教授によるオンライン講義「国際政治経済学」(7週間)を制作し、坂出准教授の担当する学部生向け「経済史2」の受講者に対し、11月から12月にかけて講義の課題として公開しました。この講義は、国際政治学と国際経済学の複合的な視座から国際社会の問題に対し、理論・歴史・政策の面からアプローチし、現代社会を多角的に見る方法を学習する内容で、受講者は各週の講義ビデオで内容を学び、課された課題で理解度を確認しながら学習を進めました。このほか、2講義で試行を予定しており、2018年度の本格稼働に向けて準備を進めています。

(酒井 博之・岡本 雅子)



図2 KoALAの画面例(左:トップページ、右:「国際政治経済学」より)

4. 教育コンテンツ活用推進委員会

(1) 委員会について

教育コンテンツ活用推進委員会(以下、「本委員会」)は、OCWとMOOCの活用推進と運用およびサービスに係わる事項の協議・検討、連絡および調整を行うために、2015年度に立ち上げられました。この「OCW・MOOC等のインターネットを活用した教育の推進」は、京都大学における教育の質的転換を図るための方略として、その「改革と将来構想」や「第3期中期目標・中期計画」において、大学の機能強化の方向性に応じた取り組みとして掲げられているものです。

本委員会の委員は、授業科目を提供する全ての部局や情報環境機構・学術情報メディアセンター等の代表者で組織されています。



教育コンテンツ活用推進委員会委員リスト

委員長	2号委員(続き)	
飯吉 透 (高等教育研究開発推進センター長)	東長 靖 (アジア・アフリカ地域研究研究科教授)	
2号委員	川嶋 宏彰 (情報学研究科准教授)	
飯吉 透 (高等教育研究開発推進センター長)	吉村 成弘 (生命科学研究科准教授)	
酒井 博之 (高等教育研究開発推進センター准教授)	河合 江理子 (総合生存学館(思修館)教授)	
田口 真奈 (高等教育研究開発推進センター准教授)	西前 出 (地球環境学学舎准教授)	
児玉 聡 (文学研究科・文学部准教授)	山内 裕 (経営管理研究部・経営管理教育部准教授)	
西岡 加名恵 (教育学研究科・教育学部教授)	喜多 一 (国際高等教育院教授)	
原田 大樹 (法学研究科・法学部教授)	<th>3号委員</th>	3号委員
坂出 健 (経済学研究科・経済学部准教授)	土佐 尚子 (情報環境機構教授)	
伊藤 哲史 (理学研究科・理学部准教授)	梶田 将司 (情報環境機構教授)	
錦織 宏 (医学研究科・医学部准教授)	飯山 将晃 (学術情報メディアセンター准教授)	
金子 周司 (薬学研究科・薬学部教授)	<th>4号委員</th>	4号委員
山本 量一 (工学研究科・工学部教授)	外村 孝一郎 (企画・情報部 情報基盤課 教育用システム管理掛長)	
平井 伸博 (農学研究科・農学部教授)	<th>5号委員</th>	5号委員
西山 教行 (人間・環境学研究科・総合人間学部教授)	吞海 和彦 (教育推進・学生支援部 教務企画課課長補佐)	
下田 宏 (エネルギー科学研究科教授)	(委員の役職等は2017年4月1日現在)	

(2)開催日と議題について

2017年度は、6月6日と11月20日に会議が開催されました。第1回の会議では、2016年度より本委員会のもとで構築を進めていた京都大学のICT活用教育を推進するためのポータルサイト「CONNECT」および2017年度より構築が始まった高大接続を促進するためのポータルサイト「KNOT」の更新・構築方針について審議されるとともに、委員の一人から発議のあったPandA連携ワーキンググループの設置について審議がなされ、それぞれ承認されました。第1回会議後には、各部局・研究科が公開するOCWのうち高校生・高校教員向けとして推薦できるコンテンツを募集しました。第2回の会議では、第1回に引き続きOCWの募集、MOOCの提供スケジュールについて説明があったほか、学内版MOOCプラットフォームであるKoALAの開発・運用・支援について説明がありました。また、各委員から推薦を受けたOCWのコンテンツ一覧が紹介され、それらがKNOTに掲載される旨が報告されました。

2017年度末には第3回の会議が予定されており、KoALA等を利用したICT活用教育のためのワークショップも、同日に開催予定です(2018年1月末現在)。

3)PandA連携ワーキンググループの設立とその活動について

PandA連携ワーキンググループ(WG)は、教育コンテンツ活用推進委員会の2017年度第1回会議の場で発議され、議論を経て同委員会の下に設置が認められたものです。

PandAとは情報環境機構が、京都大学の全学に対して提供するLMS(学習管理システム)のことです。PandAなどのLMSは個々の授業を支援するために様々な機能をもっていますが、それぞれの教員の活動は各コース用のサイトの中で行われます。このためPandAの利用率が高まる一方で、個々の教員のユースケースの把握が難しいという現状がありました。

このような状況に鑑みて、OCWやMOOCの利用促進の観点から、PandAの利活用の実施状況やグッドプラクティス、利用上の課題などを探るとともに、利用者にPandA、OCW、MOOCの利用促進のための情報を発信することを目的に設置されました。

このWGでは本センターと情報環境機構が協力する形でPandA利用のためのコンテンツの整備などを行っています。



医学部教育ワークショップでのPandAの機能説明・活用事例紹介の様子

PandA連携ワーキンググループ

国際高等教育院：

喜多 一 教授(情報環境機構長)《世話役》

情報環境機構：

梶田 将司 教授

企画・情報部 情報基盤課教育用システム管理掛：

外村 孝一郎 掛長

高等教育研究開発推進センター：

飯吉 透 教授、田口 真奈 准教授、酒井 博之 准教授、

鈴木 健雄 特定研究員

PandA連携WGでは、8月3日、10月4日、11月8日に計3回の会合をもち、以下の活動を行いました。

①PandA利用促進コンテンツの新規作成

PandA連携WG内で、PandAの利用を促すうえで必要な仕掛けについて検討した結果、利用方法のモデルを提示することが重要だという結論に至りました。これを受けて2017年度は、「PandA利用【文系・ゼミ・討論中心】—いつも忙しいM下教授の日常に、もしPandAがあれば—」というコンテンツと、「松井先生 PandAにケンカを売る」というコンテンツを制作しました。

前者は、シラバスの登録から授業の実施、課題の採点、返却までの半期の授業全体を通じて、PandAがどのように活用できるかをストーリー形式で紹介するものです。モデルとした実際の教員の授業実践と活用方法を踏まえたうえで、架空の教員が文系の少人数授業で文献講読と議論を行うという設定で制作しました。

後者は、PandAの「ヘビー・ユーザー」である実際の教員が、擬人化されたPandAとその仕様について議論をするなかで、結果的にPandAの利用可能性を紹介するというものです。これらコンテンツは後述のCONNECT (p.26-28参照) 内で公開されています。

今後、「PandA利用【理系・大講義編】」などが制作される予定です。

②PandAユーザー・マニュアルの改訂とインターフェイスの改良

情報環境機構で作成・提供している「PandA公式ガイドブック(教員用マニュアル)」に、コンテンツの追加を行いました。これは、①「PandA利用促進コンテンツの新規作成」に伴って行ったもので、モデルとした教員から、学生が発表資料を共有したり、ディスカッションを行ったりするのに大変有用だという声のあった「フォーラムツール」に関する記述の追加と、どうしても煩雑に感じてしまうという声のあったKULASISとPandA間での成績の連動に関する「Tips」の追加となります。合わせて、英語版マニュアルの方も、日本語版の教員用マニュアルの内容と対応する形で改訂しました。これによって、日英両言語ともに、教職員向けのサポートを一層充実させました。

また、LMSに不慣れな利用者にとって馴染みづらいとされていたPandAのトップページ(Gateway Page)について改善点を検討し、その結果を踏まえたうえで、Gateway Page上に説明を追加するとともに、情報の配置を変更しました。これによって、初見の学生、教職員にとっても、より「ユーザー・フレンドリー」なインターフェイスを実現しました。

③学部・研究科への支援

PandA連携WGでは、各学部・研究科からの依頼を受けて、PandA活用の支援を行っています。2017年度は医学部医学科と人間健康科学科から依頼・照会がありました。2017年度まで利用していたLMSから次年度のPandAへの移行を検討している医学部医学科では、計3回の合同検討会を開くとともに、年に1度開催されている全医学部教授を対象とした医学部教育ワークショップの場で、PandAの機能説明、活用事例紹介を行いました。また、人間健康科学科の教員会議でも同様の説明会を行いました。これらの説明会では、「大変参考になった。もっと学内での活用事例を知りたい」という声がありました。

医学部教育ワークショップでの説明の映像は、医学部構成員向けの研修教材としても利用される予定です。

(田口 真奈・鈴木 健雄・河野 亘)

The screenshot shows the 'How To' section of the PandA interface. It features a table with three columns: 'PandAの使い方' (How to use PandA), 'PandAのいいところ' (Good points of PandA), and 'PandAの悪いところ' (Bad points of PandA). The table is divided into two main sections: '1/16(月) 授業前' (Before class on 1/16) and '4/11(水) 第1回授業' (First class on 4/11). The first section includes a tip about using PandA to check the syllabus and prepare for class. The second section includes a tip about using PandA to check the syllabus and prepare for class. The table is designed to be user-friendly and informative, providing clear instructions and tips for using PandA effectively.

PandA利用促進コンテンツ

「PandA利用【文系・ゼミ・討論中心】—いつも忙しいM下教授の日常に、もしPandAがあれば—」イメージ(一部)

(<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/ht/panda/step1.php>)

5. MOST(オンラインFD支援システム)

(1) MOSTについて

教育コンテンツ活用推進委員会(以下、「本委員会」)は、OCWとMOOCの活用推進と運用およびサービスに係わる事項の協議・検討、連絡および調整を行うために、2015年度に立ち上げられました。この「OCW・MOOC等のインターネットを活用した教育の推進」は、京都大学における教育の質的転換を図るための方略として、その「改革と将来構想」や「第3期中期目標・中期計画」において、大学の機能強化の方向性に応じた取り組みとして掲げられているものです。本委員会の委員は、授業科目を提供する全ての部局や情報環境機構・学術情報メディアセンター等の代表者で組織されています。

(2) MOS宝

ポートフォリオを共有するMOSTに加え、2015年度から、大学での授業改善や教育改善のためのノウハウやツール、アイデアなどの具体的な授業内容までを共有するMOS宝(モストレジャー)(<https://most-keep.jp/treasure/>)を開発し、MOSTを補完するシステムとして運用しています。MOSTユーザーであればコンテンツが作成でき、作成されたコンテンツは誰でも閲覧可能です。MOS宝に投稿されたコンテンツは、既存のMOSTコンテンツであるスナップショットとリンクすることができ、専門領域や対象学年が異なる場合でも教育に関する実践知を共有することが期待できます。

(3) MOSTフェローシッププログラム

本センターでは、MOSTの活動を推進・活性化させるため、全国の大学教員を対象とし、MOSTを利用した授業実践の見直しや教育改善の活動に取り組む「MOSTフェローシッププログラム」を2012年度に開始しました。2017年度も選定された10名が活動を進めています。MOSTフェローに関する情報は、以下のURLよりご覧になれます。

http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/most_fellow/

MOSTフェローは、フェロー同士で活動のプロセスや成果を共有しながら、各自の教育実践を改善するとともに、教員コミュニティとしての成長も目指します。年度末の3月に、(1)大学教育研究フォーラムでの発表、(2)自身の取り組みのスナップショット(コースポートフォリオ)の作成と公開、の2点が本プログラムの活動成果となります。この間に行われる2度の対面ミーティングについて、以下に紹介します。

①第1回ミーティング

2017年3月21日に第1回ミーティングが京都大学で開催されました。このミーティングでは、各フェローの自己紹介や実践紹介を行い、活動の第一歩を踏み出します。また、ミーティングの前日、第5期MOSTフェローの修了式が行われ、本プログラムを終了した9名のMOSTフェローに修了証が授与されました。第5期MOSTフェローの成果であるスナップショットは以下のURLで閲覧可能です。

https://most-keep.jp/most/gallery-most_fellow_05/

② 第2回ミーティング(合宿)

2017年8月24日～25日、北九州市立大学北方キャンパス新図書館において、第2回ミーティングが合宿形式にて開催されました。この合宿では、前期に取り組んだ各自の授業実践について、作成途上のコースポートフォリオ等を用いて活動報告が行われました。この合宿には、歴代フェローも参加し、期を越えた交流がなされました。



MOSTフェロー合宿の様子

(4) MOSTフェロー発表会

2016年度の第23回大学教育研究フォーラムにおいて、MOSTフェロー発表会「モストDE デートー異分野コラボレーションによる共同的授業実践の創発」が実施されました。ここでは、MOSTフェローの専門分野が多様であることを生かした異分野コラボレーションによる共同的授業実践の取り組み事例を紹介しました。

MOSTフェローシッププログラムは、今後も活動を継続していく予定です。本学教員からの応募もお待ちしております。

(岡本 雅子・田口 真奈・酒井 博之・飯吉 透)



MOSTフェロー発表会の様子

6. ICT活用教育のためのポータルサイト(CONNECT)

本センターでは、2017年度、全学組織である教育コンテンツ活用推進委員会(p.22-24参照)のもと構築したICTを活用した教育を推進するためのポータルサイト(CONNECT: CONtents for Next Education and Communication with Technology)を正式にオープンしました(図1)。

同サイトは、京都大学の教職員に向けてICTを利用した教育コンテンツ(MOOC、OCW*、講義ビデオ、教材等)を制作・活用するための情報を提供しており、月に約2回のペースで新しい記事を公開しています。また、外国人教職員がアクセスしやすいように、日英両言語に対応しています。

*MOOCおよびOCWについては、それぞれ、p.18-20とp.16-17に説明があります。



CONNECT: <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/>



図1 CONNECT トップ・ページのイメージ

(1)CONNECTの特徴と概要

京都大学では、これまでMOOCやOCW、PandA**、KoALA***といったICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを全学として整備・運用してきました。本センターではMOOC、OCW、KoALAの制作・運用を担当しています。しかし、これら多様なICTコンテンツ・プラットフォームの一方で、それらを制作・活用する上で必要となる情報をまとめたウェブサイトはこれまでありませんでした。CONNECTはこれらの情報を一つのウェブサイトにもとめ、目的別に適切なサイトへと誘導するポータルサイトです。

具体的なコンテンツとしては、京都大学が保有する各種コンテンツやプラットフォームの概要をまとめた「Projects」、主に学内におけるICT教育の実践例を紹介する「Topics」、MOOCやOCWの制作方法をステップに分けて整理し、また、PandAの活用モデルを紹介する「How To」、本サイトで紹介している各種のコンテンツや教育コンテンツ活用推進委員会、ICT活用教育全般に関する質問をまとめた「よくある質問(FAQ)」、そして、「お問い合わせフォーム」があります。

** PandAは京都大学情報環境機構が全学に提供している学習支援システム(LMS: Learning Management System)です。

*** KoALAについては、p. 21をご覧ください。

(2)Projects

「Projects」のページ(図2)では、現在、MOOCやOCW、PandA、オンラインFD支援システム: MOSTについて紹介しており、今後KoALAの紹介ページが追加される予定です。各ページは、概要および最新・お勧めコンテンツの紹介、各種のリンク等で構成され、各「Project」のポータルページに相当します。

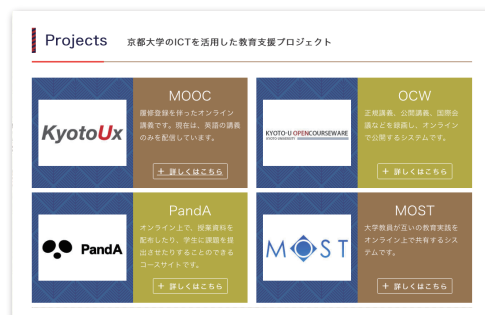


図2 「Projects」トップ・ページ

(3) Topics

「Topics」のページでは主に、京都大学でICTを用いて特徴のある授業を行っている教員の事例を、インタビュー形式で紹介しています。現在利用しているICTをなぜ授業に導入したのか、その効果といった点のみならず、授業にかける思いや、苦労を通じて感じた手応えといった、経験者だからこそ語ることのできる話が盛り沢山です。

また、その他のICT活用教育に関連したイベントの開催報告や、次ページで紹介する「Trends」のバックナンバーもこちらでご覧いただくことができます(図3)。

教員インタビュー

- 一人ひとりの学習スタイルの尊重を目指す反転授業
薬学研究科 金子周司先生
- 電子教科書を用いて目指す「より人間らしい」教育
理学研究科 馬場正昭先生
- 講義をもっとオープンに
医学研究科 山田亮先生
- 多様な文化の中で漫画を通して学ぶ生命倫理
文学研究科 児玉聡先生
- おもてなしの議論を通して異文化を理解する
経営管理大学院 山内裕先生
- 「ニコ動的講義」が生み出す教員と学生のシンクロ
情報学研究科 水原啓暁先生
- MOOCを通してつかんだ教え方のヒント
工学研究科 跡見晴幸先生
- 気軽に参加できる数学講義
理学研究科 伊藤哲史先生
- TwitterとPandAによって変容するコミュニケーションの質・関係性
人間・環境学研究科 吉田純先生

イベント 開催報告

- 総長 MOOC イベント
“President’s MOOC ‘Evolution of the Human Sociality’ Live!”
- 国際シンポジウム
「MOOCは大学教育をどのように進化させるのか」
- 国際シンポジウム
「MOOC時代の大学教育改善」
- 国際シンポジウム
「学習のための、学習としての評価 -PBLとMOOCにおける学習評価の可能性-」
- 学内ワークショップ
「教育の最先端：MOOCって何？ -その利用法と実践ノウハウまで-」

Trends：最新のICT活用教育動向

- 「MOOCをめぐる最新動向」 (第1回：2017年6月30日配信)
- 「高等教育にもVR・AR」 (第2回：2017年7月11日配信)
- 「人工知能(AI)と高等教育の未来？」 (第3回：2017年7月21日配信)
- 「MITにおけるICT活用教育推進のための学内イベント “MIT Teaching with Digital Technology Awards”」 (第4回：2017年9月20日配信)
- 「ライス大学による電子教科書プロジェクト “OpenStax”」 (第5回：2017年10月4日配信)
- 「アリゾナ州立大学によるMOOCを用いた初年次教育 “Global Freshman Academy”」 (第6回：2017年12月7日配信)

... and more!

図3 「Topics」コンテンツ一覧

ICTを使って特徴のある授業実践をされている先生の情報をお待ちしております。次ページで紹介する「お問い合わせフォーム」からご連絡ください。

(4) Trends

「Trends」では、国内外のICTを活用した教育に関する最新情報を様々な話題とともに紹介しています。各記事には、概要や背景知識とあわせて、関連メディア・機関へのリンクも掲載されているため、リンクをたどることでより詳しい内容を参照できるようになっています。2017年度は計6本の記事を公開し、その話題は、MOOC、AI(人工知能)、VR(仮想現実)、電子教科書と多岐にわたりました。今後も国内外の最新動向を踏まえつつ、定期的更新をしていきます。

(5) How To

「How To」のページ(図4)ではMOOC、OCWを制作する手順をステップに分けて紹介しているほか、それぞれの問い合わせ先や申し込みフォーム、FAQへの内部・外部リンクを置くことで、関心をもった教職員が制作時に必要となる情報を網羅的に扱っています。2017年度はPandAの活用モデルケースも公開しました。今後も利用者のニーズに合わせて、「How To」の項目が増えていく予定です。

(6)「よくある質問(FAQ)」

「よくある質問」では、これまでに寄せられたICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを制作・活用する上での疑問に対して、各項目別に回答しています。それぞれの回答には適切な内部・外部ページへのリンクが貼ってあり、それらをたどることで、より詳しい情報を得ることができます。

(7)「お問い合わせフォーム」

本ページの内容やMOOC、OCWへのご質問やご意見、学内の教育コンテンツ活用に関する情報を寄せていただくための「お問い合わせフォーム」を設けています。

(田口 真奈・鈴木 健雄・河野 亘)



図4 「How To」イメージ(イメージはOCWの制作手順)

7. 高大接続を促進するためのポータルサイト(KNOT)

(1) KNOTとは

KNOT(Kyoto University Nexus for Open educational Treasure)とは、京都大学が保有するオープンコンテンツを、日々の学習・教育・課外活動において広く役立ててもらうためのポータルサイトです。主な対象ユーザー層は、高校生・高校教員・留学希望者です。

京都大学は、OCWやMOOCをとおして、講義・公開講座・シンポジウム等の映像データならびにそれらの場で使用された補助資料を公開しています。2017年12月現在のコンテンツ数は、OCWは800以上、MOOCは12となっています。普段の授業や探究活動、自主学習、部活動などにおける発展的な学習・教育や、大学の授業を気軽に疑似体験することができる媒体として、多様な活用の可能性が考えられます。

KNOTは、以下の各コンテンツの配信をとおして、OCW・MOOCの積極的かつ効果的な利活用をサポートします(サイトは2018年度に開設予定)。

(2) KNOTの各コンテンツ

● おすすめコンテンツ

高校生・高校教員におすすめのOCW/MOOCコンテンツを紹介します。

● インタビュー

OCW/MOOCに関心のある高校教員などへのインタビューを行い、OCW/MOOCのユーザーなどの声を紹介します。

● 活用アイデア

高校生や高校教員、留学希望者が、OCW/MOOCを学習・教育に活用した事例や、活用のためのアイデアを紹介します。

● 教えて! KNOTさん

コンテンツを活用する上で気になる、著作権への対応やOCW/MOOCサイトの使い方などについて、会話形式でわかりやすく解説しています。

● KNOT関連イベント報告

KNOT関連で開催されたイベントをレポートします。



「KNOT」イメージ

(3) 高校におけるオープンコンテンツ活用ワークショップの開催

8月19日、高槻中学校・高等学校にて、「ICTを活用した高大接続ワークショップ—京大の教育コンテンツを授業で使ってみよう」を開催しました。本ワークショップは、高校教育関係者に京都大学のOCW・MOOCを教育の現場で広く活用してもらうための初の試みでした。高校教員をはじめ行政職員など、全33名が全国各地から参加しました。

名 称	ICTを活用した高大接続ワークショップ—京大の教育コンテンツを授業で使ってみよう
日時・会場	8月19日13:00-16:30、高槻中学・高等学校

プログラム:

司会 松下 佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)／前田 秀樹(高槻中学校・高等学校教頭)

【挨拶】本ワークショップの意義

- 岩井 一(高槻中学校・高等学校校長)

【講演】ICTで切りひらく高大接続の新しいかたち

- 飯吉 透(京都大学高等教育研究開発推進センター長・教育担当理事補)

【紹介】京都大学の教育コンテンツ

- 田口 真奈(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

【提案】高槻中学校・高等学校による実践事例報告

- 田中 敏博(高槻中学校・高等学校化学教諭) ● 奥野 直人(高槻中学校・高等学校生物教諭)

【ワークショップ】OCW活用アイデアについてのディスカッション・発表

参加者は、まず、オープンエデュケーションやOCW・MOOCについての解説講演、ならびにOCWを教育場面に活用した高校教員による先行実践報告を聞きました。新しい教育の可能性や刺激的な実践事例にふれて、多くの参加者はますます意欲を高めていました。

その後、参加者は関心のある教科ごとにグループを組み、タブレット端末を用いて実際にコンテンツを閲覧しながら、教育場面に於いて活用できそうなコンテンツを探索するほか、OCW・MOOCの新たな活用法について広く議論しました。最後に行われた各グループ代表者による成果発表では、OCWを用いたアクティブラーニング型授業(外国語グループ)や、サマリーライティング教材としてのOCW活用法(化学グループ)など、多角的な切り口から活発な提案がなされました。

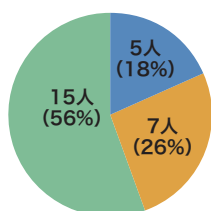
事後アンケートでは、半数以上が「京大のOCW・MOOCを知らなかった」と回答する一方、全員が「京大のOCW・MOOCをすぐに使ってみよう／機会があれば使いたい」と回答しており、多くの参加者はワークショップをとおして発展的な教育実践への大きな示唆を得ていました。

今後は、より多くの高校生・高校教員・留学希望者にOCW・MOOCを効果的に活用してもらえよう、ユーザーの声を丁寧に聞き取りながら、各コンテンツの拡充を進めていきます。

(田口 真奈・河合 直樹)

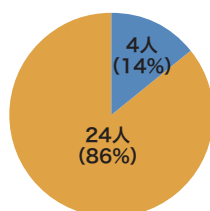
Q1 京都大学のOCW・MOOCのことはすでに知っていましたか

- 閲覧したことがあった
- 知っていたが閲覧したことはなかった
- 知らなかった



Q2 京都大学のOCW・MOOCを実際に使ってみましたか

- すぐに使いたい
- 機会があれば使いたい
- あまり使いたくない
- 全く使いたくない



※Q1への未回答者が1名存在するため、回答者数はQ2と一致しません。

事後アンケート結果



ワークショップのちらし



当日の様子

IV. 教育アセスメント

2016年4月、本センターに「教育アセスメント室」が設置されました。溝上慎一教授(室長)と山田剛史准教授のスタッフ体制で室の業務に取り組んでおります。

教育アセスメント室の主な業務は、

- ・全学や部局の教学IR (Institutional Research)、教育に関するアセスメント、エビデンスの収集等に関して支援・連携を行うこと
- ・そこから得られる知見や成果を、高等教育研究開発推進センターの全学・部局の教育学修支援に繋げることにあります。

1. 「京大生プロフィール」の開発

教学運営を支える教学IR推進の一環として、学生の学習実態や、全学・部局の教育ポリシーに関する学修成果(教務データや調査データ等)を多面的・縦断的に把握し、教育・入試改革の検証や改善に資するため「京大生プロフィール」(eポートフォリオシステム)を設計・開発しました(図1)。京都大学の既設サーバー上で運用するシステムである京大生プロフィールには、全学の教学IRのデータベース、データウェアの機能を持たせつつ、学生自身の学びの足跡を可視化するeポートフォリオとしての機能をも持たせるものです。

京大生プロフィールは、(1)学生が自らの学びと成長を振り返り自己評価眼を身につけること、(2)教員が学修支援・指導の手段(対話のツール)として活用すること、(3)学部・学科等が教育改善を促すためのデータとして活用すること、(4)学部・学科等が外部評価等に対応する際の根拠資料(エビデンス)として活用することを可能にするシステムとなっています(図2)。

一つでも多くの部局の支援につながればと思います開発を行いました。部局ごとにある程度カスタマイズすることも可能ですので、ご興味・ご関心を持たれた際には、ぜひ教育アセスメント室までお問い合わせいただければと思います。

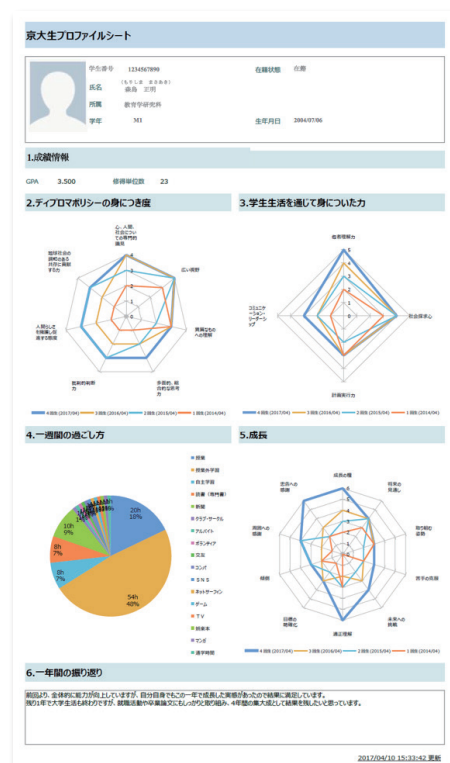


図1 京大生プロフィールのイメージ



図2 京大生プロフィールの利用可能性

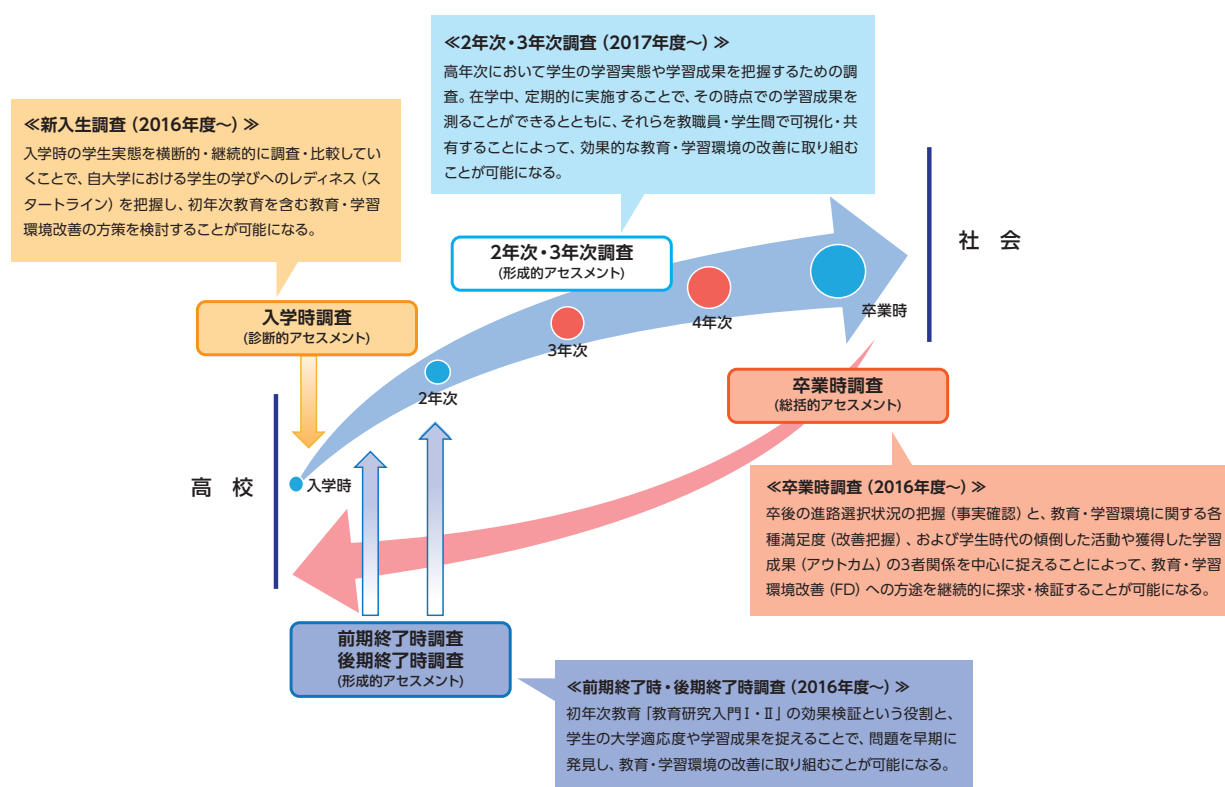
2. 教育学部との連携

2016年度より、教育アセスメント室は、教育学部における教育アセスメントの支援・連携を行っています。2016年度には、主に以下の3つの活動を行いました。

- (1) 教育学部初年次専門科目「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」(通年)における学生アセスメント(入学時、前期終了時、後期終了時)を通じた効果検証と教育改善支援
- (2) 特色入試追跡調査WGにおける特色入試入学生への質的・量的調査の実施
- (3) 自己点検・評価委員会主催の教育学研究科セミナーでの情報提供および同委員会と協働による卒業時・修了時調査の設計

この詳細および成果については、2016年度の『京大のFD 2016』(p.22-23)や『京都大学高等教育研究』(第22号、p.55-66)などでも紹介させてもらっています。こうして、入学時、前期終了時、後期終了時、そして学部卒業時、研究科修了時に一貫性を持つ形で、新たな調査が作成・実施されました。この間、話題に上っているディプロマ・ポリシーの検証という意味でも、調査の中に組み込むことでこれに応えられるように設計しています。

2017年度は、こうした取り組みを継続させるとともに、整備されていなかった2年終了時と3年終了時の調査を作成し、実施に取りかかっています。これで、入学から卒業まで継続的に学生の学習実態や学習成果を把握する仕組みが構築されました(下図参照)。



教育学部における教育アセスメントの支援・連携(2016年度～)

教育活動の成果をどのように捉えることが可能なのかといった点も含め、教育アセスメントは現在の高等教育において重要な役割を担っているものだと思います。小さな所帯ではありますが、可能な限り部局固有のニーズなども踏まえながら支援・連携を行うことができればと思います。

(山田 剛史・溝上 慎一)

V. 国際連携

本センターでは、海外の大学教育の研究開発組織や研究者・実践者との交流・共同研究を進め、そのプロセスや成果をシンポジウム、研究会、書籍などで公開しています。

1. 国際シンポジウム「大学教育の創造的破壊と未来—世界最先端の次世代大学が仕掛けるエリート教育を探る—」

次世代の大学として世界的な注目を集めているミネルバ大学 (Minerva Schools at KGI) より、創立者でCEOのベン・ネルソン氏ほか2名をお招きし、5月30日に、京都大学芝蘭会館にて国際シンポジウムを開催しました。

ミネルバ大学は、世界7都市の学生寮を移動しながらオンラインで学ぶという、ユニークな全寮制の4年制大学です。2014年に米国サンフランシスコで設立された新しい大学ですが、開学2年目には早くも、入学希望出願者が98カ国1万1千人以上(合格率2.0%)に達しています。

ミネルバ大学のカリキュラムは、最新のICT(情報コミュニケーション技術)を活用した少人数のセミナー形式の授業と、授業外でのプロジェクト学習を中心に構成されています。「批判的思考力」「創造的思考力」という2つの個人的技能と「プレゼンテーション能力」「対人コミュニケーション能力」という2つの対人的技能を合わせた「4つのコア技能」を、フィールドでの豊富な体験学習、および、パフォーマンス評価と学習データ分析に基づいた即時的なフィードバックや適切なアドバイスを通じて、習慣的・経験的に身につけられるようにデザインされています。

本シンポジウムは、ミネルバ大学に代表される新しいイノベティブな大学教育の可能性や課題、次世代大学の台頭が既存の伝統的な大学に与えるインパクトや影響などについて議論と理解を深め、大学教育の未来を予見することをめざして企画されました。

平日の午後にもかかわらず、参加者数は159名にのぼり、このテーマやミネルバ大学の取り組みに対する関心の高さがうかがわれました。参加者の内訳は、学内74名(教職員43名、学生31名)、学外85名(ゲスト登壇者4名含む)で、学内からの参加者が多かったこと、とりわけ、いくつかの授業とタイアップしたことにより学生の参加者が多かったことが注目されます。

また、事後アンケート(回答者数57名)の結果を見ると、有意義度は平均4.4(5件法)で、9割を超える参加者から有意義であったという回答が得られました。自由記述では、「ミッションを明確にした上で、既存の教育を問い直すこと、学習者が主体的になれるような仕組みをつくること。それが体現されていたように思います。自分の現在の学びを問い直す機会になりました。」「ミネルバ大学が目指す、真の高等教育(特別なものではなく)について理解が深まった。また、感銘を受けた、その理想や情熱に。」「工学部系では実験実習があるのでただ単に本やインフォメーションだけでは履修できないと思います。ミネルバ大学の手法は文系では良いと思います。」「反グローバリズム時代になってきていますので、ミネルバ大学のような大学がさらにエリートと大衆のギャップを生むと思いますが、どうでしょうか?」といった意見が寄せられました。批判的なコメントも含め、大学教育のあり方について思いをめぐらす機会になったことは間違いありません。

このような国際シンポジウムが、教職員の研修としてだけでなく、学生の学びにとっても意義をもちうることが感じられたシンポジウムでした。



● 国際シンポジウム: <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2017/07/20170530.pdf>

(松下 佳代)



プログラム	
14:00 ～	開会挨拶 飯吉 透（京都大学教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長）
14:05 ～	活動報告「京都大学の取り組み」 酒井 博之・田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）
14:25 ～	特別講演「ミネルバ大学と高等教育の未来」 山本 秀樹（ミネルバ大学日本事務所代表）
14:45 ～	基調講演“How to Update Existing Higher Education?” Ben Nelson (Founder, Chairman, and CEO, Minerva schools at KGI)
15:25 ～	休憩
15:35 ～	対談 “Open Educational Innovation: Creative Destruction or Destructive Creation?” Ben Nelson × 飯吉 透
16:15 ～	パネルディスカッション モデレーター：飯吉 透 指定討論者：君和田 卓之（三井物産サービス事業部ヒューマンキャピタル事業室長） 松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授） パネリスト： Ben Nelson Kenn Ross (Managing Director, Asia, Minerva Schools at KGI) 君和田 卓之 松下 佳代
17:45	閉会

2. 訪問・参加報告

(1) AEARU(The Association of East Asian Research Universities：東アジア研究型大学協会)

会議名称	AEARU Symposium on Teaching and Learning (http://www.shss.ust.hk/conferences/2018-01-05-AEARU-teaching-and-learning/)
期間・場所	2018年1月5～6日、香港科技大学(香港)
参加者	飯吉 透

本シンポジウムでは2日間に渡って、AEARU加盟校におけるオンライン教育に関する優れた取り組みや課題について、各大学のアドミニストレーターを中心に情報・意見交換が行われました。京都大学参加者は、初日の全体セッション“Training Program Sharing on Teaching and Learning Using On-Line Resources”で司会を務め、“Promoting the Creation, Use and Re-Use of Online Educational Resources to Advance Teaching and Learning”と題した講演で、本学のMOOC、OCWやSPOC等のICT活用教育とその促進のための各部局や教職員に対する支援に関する取り組みについて発表を行いました。また、2日目のパネルセッションでは、今後MOOC等をAEARU加盟校間の交換留学の活性化や大学の連携による教育の国際化のためなどの目的に活用する可能性を巡る議論に、パネリストとして参加しました。

（飯吉 透）

(2) edX Global Forum

会議名称	2017 edX Global Forum (http://globalforum.edx.org)
期間・場所	12月5～6日、Fairmont Chateau Whistler(カナダ)
参加者	飯吉 透・酒井 博之・Isanka Wijerathne

12月5日から2日間にわたり、カナダ・ブリティッシュコロンビア州のFairmont Chateau Whistlerにおいて第7回目となるedX Global Forumが開催されました。edXおよびその加盟機関より関係者が集い、MOOCやそれを取り巻く教育全般に関する現状や課題、edXの今後の方向性等に関して議論がなされました。



今回のGlobal Forumでは、前年に注目の集まった、正規の修士課程プログラムとの単位互換を実現するプログラム「MicroMasters」や、企業や大学が提供する、ニーズの高い職業における専門スキルを学ぶ「Professional Certificate」プログラムについての成果報告がなされるなど、単独の講義配信に加えて教育プログラムとしてのMOOCの提供にも関心が集まりました。

(酒井 博之)

(3) Open edX Conference

会議名称	2017 Open edX Conference (https://con.openedx.org/) EMOOCs 2017
期間・場所	5月22～26日、マドリッド・カルロス3世大学(スペイン)
参加者	Isanka Wijerathne

今回のOpen edXカンファレンスは、欧州のMOOC関係者が集うEMOOCsカンファレンス(European MOOCs Stakeholders Summit)との合同開催で、スペインのマドリッド・カルロス3世大学がホストとなって開催されました。Open edXカンファレンスの参加者は約400名で、主にOpen edXの開発者、技術者、教育研究者、Open edXの関連企業などが参加しており、日本からは東京工業大学、大阪大学、慶応大学の関係者が参加していました。私は、特にテクノロジー面やMOOC・Open edXに関連するセッションを中心に参加しました。特に初日のチュートリアルセッションでは、京都大学におけるOpen edX導入に関してedXの関係者から貴重な情報を得る機会となりました。



また、同時開催のEMOOCsカンファレンスにも参加でき、edXとは異なるMOOCプロバイダの関係者から情報を得るなど新たな経験ができました。

(Isanka Wijerathne、訳：酒井 博之)

Ⅵ. コミュニティ・ネットワーク形成支援

大学教育に関する改革や改善の取り組みは、情報戦とも言われるほど、国内外の新しい施策や学術的な動向、それに伴う他の大学や学部の実践的な取り組みを情報収集する必要があります。その上で、必要な事項を、京都大学全体や部局の教育改革・改善の取り組みに反映させなければなりません。

本センターでは、このような情報収集の機会、そこからコミュニティ、ネットワーク形成をはかるべく、「あさがおメーリングリスト」「大学教育研究フォーラム」「大学生研究フォーラム」の3つのシステムを構築しています。

1. あさがおメーリングリスト <http://kyoto-u.s-coop.net/asagao/>

本センターが、2003年より15年にわたって提供しているサービスです。

- メーリングリストアーカイブ(検索機能付き)
- メール投稿フォーム
- ユーザー登録・登録解除フォーム
- メールアドレス変更フォーム

以上の4つの機能からなり、本センターや京都大学からの高等教育に関する案内が全国の関係者に配信されます。登録ユーザーからも、高等教育に関する各種イベント等の案内が配信されるので、全国の主だったイベントや今どのような施策や取り組みに全国の関心が向けられているかを、このメーリングリストを通して把握することができます。

2018年1月現在で、ユーザー登録数は4,836名(2015年3,429名、2016年4,192名)であり、投稿・配信数は年々増加傾向にあります(2015年621件、2016年944件、2017年975件)。全国の高等教育改革や改善に関わる多くの関係者は、あさがおメーリングリストに登録しています。

2. 大学教育研究フォーラム

(1) 大学教育研究フォーラムとは

本センターが1994年の設立以来20年以上にわたってなされている、大学教育改革や改善に関する施策や実践が報告される国内最大級のフォーラムです。2017年度で第24回を迎えます。

大学教育研究フォーラムは、①特別講演、②シンポジウム、③学術セミナー、④個人研究発表(口頭発表・ポスター発表)、⑤参加者企画セッション、を基本プログラムとして、年によって様々なプログラム追加します。

(2) 第23回大学教育研究フォーラム(2017年3月19-20日)の開催

2018年1月現在、2017年度のフォーラムはまだ開催されておりませんので、ここでは2016年度の実績をご報告致します。2016年度は、以下のプログラムで開催し(敬称略)、計807名の方が参加しました。

①特別講演

新井 紀子(国立情報学研究所社会共有知研究センター長)

「人工知能が大学入試を突破する時代、人は何をすべきか？」

②シンポジウム「アセスメント・イン・アクションー評価の新しい形ー」

報告者1 土井 隆雄(京都大学宇宙総合学研究ユニット特定教授)

「有人宇宙活動のための人材育成について」

報告者2 平田 オリザ(東京藝術大学COI 研究推進機構特任教授)

「知識の量を量る試験から、学ぶ仲間を選ぶ試験へ」

報告者3 錦織 宏(京都大学医学教育推進センター准教授)

「医学教育における学生・研修医の評価」



大学教育研究フォーラム2016の様子

③MOSTフェロー発表会「モストDE デートー異分野コラボレーションによる共同的授業実践の創発ー」

本センターでは、特徴ある授業実践を行っている全国の大学教員が参加するMOSTフェローシッププログラムを、2012年より実施してきました。MOSTフェローは、対面やオンラインで交流しながら、1年間かけてそれぞれの授業改善に取り組み、授業実践の中で直面する様々な教育的課題を相互の実践知から解決する大学教員の情報共有コミュニティを目指して活動しています。

当日は、異分野コラボレーションによる共同的授業を実践された先生方の事例を楽しく紹介することで、このような「新しいFDモデル」の可能性をみなさんと考えました。

報告者 矢野 浩二郎(大阪工業大学情報科学部准教授/第3期MOSTフェロー)

村上 裕美(関西外国語大学短期大学部准教授/第1期MOSTフェロー)

坂田 信裕(獨協医科大学基本医学情報教育部門教授・情報基盤センター長/第2期MOSTフェロー)

道幸 俊也(関東学院大学法学部法学科助教/第4期MOSTフェロー)

渡邊 美智留(横浜薬科大学臨床薬学科准教授/第4期MOSTフェロー)

森田 泰暢(九州産業大学経済学部経済学科准教授/第5期MOSTフェロー)

司 会 木村 修平(立命館大学生命科学部生命情報学科准教授/第1期MOSTフェロー)

勝又 あずさ(成城大学キャリアセンター特別任用准教授/第1期MOSTフェロー)

企画協力 長田 尚子(立命館大学共通教育推進機構准教授/第1期MOSTフェロー)

④学術セミナー:

- 1 深堀 聡子(国立教育政策研究所高等教育研究部長)

「学問分野別学修成果アセスメントから学位プログラム設計へーエキスパート・ジャッジメントによる共通性と多様性の両立ー」

- 2 浅野 茂(山形大学学術研究院教授)

「米国におけるIR/IEの最新動向と日本への示唆」

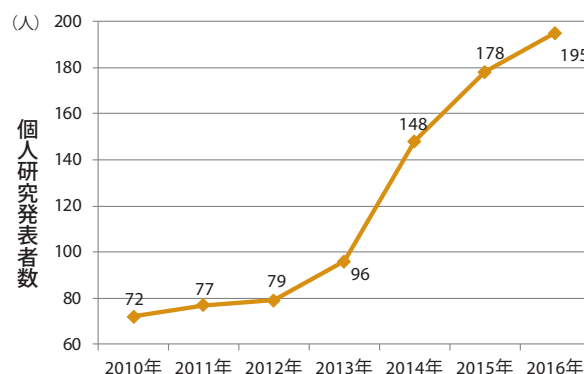
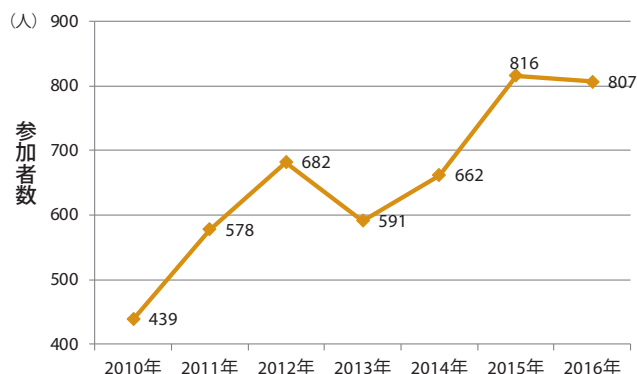
⑤参加者企画セッション(計14件) ※2015年度は11件

ある特定のテーマでの研究・実践交流を促す目的で、一般参加者から募集するセッションとなっています。2016年度では「学生のノートテイキングから授業のあり方を考える」「小規模大学におけるIR」「アクティブラーニングの評価のフロンティア」など。

⑥個人研究発表(口頭発表・ポスター発表)(計195件) ※2015年度は174件

(3) 成果と課題

この5年フォーラムへの参加者数、個人研究発表者数はほぼ増加傾向にあります。2016年度の個人研究発表への申込者数は195件であり、2015年度からさらに増加しています。



参加者数・個人研究発表者数の増減(2010-2016年)

2. 大学生研究フォーラム

(1) 大学生研究フォーラムとは

年に1回、京都大学高等教育研究開発推進センター、東京大学大学総合教育研究センター、公益財団法人電通育英会とが三者共同で行っているフォーラムです。

近年の大学教育は、もはや単なる知識を教授する場だけでなく、学校から仕事・社会へのトランジションを課題として、資質・能力も併せて学生を育てる場として期待されるようになっていきます。大学生研究フォーラムは、現代大学生の姿を、調査結果を見ながら、また企業・社会の関係者の声を聞きながら議論する場です。

(2) 大学生研究フォーラム2017(2017年8月25日)の開催

最終回を迎えた2017年度のフォーラムでは、「10年目を迎えた大学生研究フォーラム」というテーマで、百周年時計台記念館にて開催されました。アクティブラーニング、キャリア教育、学校から仕事・社会へのトランジションをテーマとして、高校・大学・企業を繋いだこのフォーラムの軌跡をまとめつつ、最先端の現場報告も加味して、これからの10年を展望しました。

①講演

溝上 慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

「10年間の大学生研究を振り返って」

②高校・大学、企業からの報告

今後の10年の課題を以下3つの連携から考えました。

●企業との連携

松高 政(京都産業大学准教授)／岩佐 峰之(京都市立西京高校主幹教諭)

●学びとキャリアの連携

石山 恒貴(法政大学大学院教授)／今村 久美子(認定NPO法人カタリバ代表理事)

●地域との連携

片峰 茂(長崎大学学長)／中村 怜詞(島根県立隠岐島前高校教諭)

③パネルディスカッション

パネリスト 中原 淳(東京大学准教授)／松下 佳代(京都大学教授)／児美川 孝一郎(法政大学教授)

(3) 成果

350名定員のなか、当日は334名の方にご参加をいただきました。ほぼ期待どおりの参加者数でした。講演録(ダイジェスト)は、電通育英会の機関誌『IKUEI NEWS』に掲載されています。

<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/transmission/forum/archive/>

(溝上 慎一)

VII. 産学連携

1. 学校と社会をつなぐ調査(通称「10年トランジション調査」)

2013年度より、本センターと学校法人河合塾教育イノベーション本部が共催して、「学校と社会をつなぐ調査」(通称:10年トランジション調査)を実施してきました。

当時(2013年)高校2年生だった生徒はいま大学3年生(現役合格者)になっています。2017年12月現在、高校2年生から大学1年生へのトランジションについて、成果報告の出版を『高大接続の本質－学校と社会をつなぐ調査』から見えてきた課題－』(学事出版)として刊行準備中です(2018年1月予定)。

本書の大きな結果は、次の6点にまとめられます。

- (1) 高校2年時における4つの資質・能力は、大学1年時のそれぞれの資質・能力に大きく影響を及ぼす。
- (2) 大学1年時で主体的な学習態度をもっていることが、資質・能力を身につけるために、アクティブラーニング外化を行うために重要である。
- (3) 大学1年時の主体的な学習態度は、同じく大学1年時の二つのライフで説明される。その二つのライフは、高校2年時のキャリア意識に大きな影響を受ける。
- (4) 高校2年時の資質・能力のなかでも、計画実行力は大学1年時の主体的な学習態度に影響を及ぼし、コミュニケーション・リーダーシップ力は同じく大学1年時のアクティブラーニング外化に影響を及ぼす。
- (5) とくにジェンダー、大学偏差値、学部学科、中高一貫の属性・社会的要因が、資質・能力や学習、キャリア意識に影響を及ぼしていた。
- (6) 高校2年時の勉学タイプ、勉学そこそタイプは、大学1年時の学びと成長(資質・能力・学習、キャリア意識)にしっかり繋がる生徒タイプである。授業外学習を行う、キャリア意識が高い、対人関係、自尊感情が良好であること、すべてをバランス良く持ち合わせることがポイントである。

報告書は下記のURLにあります。あわせてご覧ください。

[http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/img/26_transition\(T2\)report09-2016.pdf](http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/img/26_transition(T2)report09-2016.pdf)

(溝上 慎一)

全学機能組織としてのセンターの取組と連携体制

ミッション

- 高等教育における教授法、教育課程、教育評価、教育制度、ICT活用等、教育システムに係る開発と実践を行う
- 本学の教育改革・改善に資する取り組みについて、専門的立場から調査・企画・実施・評価・助言・協力を行う
- 実践的研究に基づく成果を、本学の教育の質の向上に供するとともに、国内外の高等教育の発展に寄与させる

事務局

吉田南構内共通事務局、教育推進・学生支援部教務企画課／入試企画課、企画・情報部企画課IR推進室等

全学委員会

教育制度委員会、FD研究検討委員会、教育コンテンツ活用推進委員会、大学評価委員会等

各 部 局

教育学研究科、国際高等教育院、情報環境機構、学術情報メディアセンター、図書館機構、各学部・大学院等

大学執行部

高等教育研究開発推進センター

協議委員会

運営委員会

学内研究担当教員

高等教育教授システム 研究開発部門

教育メディア研究開発部門

教育アセスメント室

教育制度改革

大学評価や教育の国際化対応を推進するための様々な制度改革の支援・推進を行う
(例)
● 学部コースツリー
● 大学院カリキュラムの可視化
● GPA制度
● 科目ナンバリング制度
● 全学教育シンポジウム
● 各種勉強会

FD(Faculty Development)

授業改善にとどまらない、より広い教育改革・改善の推進を視野に入れ、本学学生の学習成果の向上を図る
(例)
● 新任教員教育セミナー
● 教育サポートリソース(冊子)
● 部局間連携FD
● プレFD
● 関西地区FD連絡協議会
● 大学教育研究フォーラム

ICTの教育的活用

OCW・MOOC等のICTを活用した教育方法の本学における効果的導入・普及を図る
(例)
● オープンコースウェア(OCW)
● 大規模オープンオンラインコース(MOOCs)
● 学習管理システム(CMS/LMS)
● Mutual Online System for Teaching & Learning (MOST)
● 教材開発・支援

IR(Institutional Research)

アセスメント結果(エビデンス)を通じた教育・学習の質的向上を目指す取り組み(教育に係るIR)を推進する
(例, 今後の計画)
● 学生の学習実態の組織的把握(全学学生調査の開発等)
● 学習成果の可視化(「京大生プロフィール」の開発等)
● 教育・入試改革プログラムの効果検証

京都大学高等教育研究開発推進センター 教員・スタッフ

飯吉 透 教授(センター長)

藤岡 千也 特定助教

松下 佳代 教授

長谷 海平 特定助教

溝上 慎一 教授

Isanka Wijerathene 特定研究員

土佐 尚子 教授(兼)

緒方 孝亮 特定研究員

田口 真奈 准教授

安宅 純子 特定研究員

酒井 博之 准教授

鈴木 健雄 特定研究員

山田 剛史 准教授

河野 亘 研究員

森村 吉貴 特定准教授

木崎 稜平 技術補佐員

岡本 雅子 特定助教

坂本 久理 特定職員

斎藤 有吾 特定助教

林 路子 特定職員



京都大学 Center for the Promotion of Excellence
in Higher Education, Kyoto University
高等教育研究開発推進センター

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL. 075-753-3087 FAX. 075-753-3045

発行日／2018年3月15日 発行／京都大学高等教育開発推進センター 印刷／双林株式会社